一般公開用

『野生動物などの観察ツアー
および情報発信の現状と今後の可能性の検討』

２０２０年　３月

公益社団法人日本山岳ガイド協会
訪日外国人対応委員会

はじめに

本レポートは、公益社団法人日本山岳ガイド協会の訪日外国人対応委員会より依頼を受け、フリーランスのライター・編集者である谷山宏典と小林百合子が取材・調査を行い、まとめたものである。

日本山岳ガイド協会の訪日外国人対応委員会では現在、野生動物観察をテーマとした「ツアーコンテンツの開発・改善」のための活動を行っている。具体的には、訪日外国人の受け入れ（外国語対応など）や WEB による情報発信の体制の整備、野生動物観察をテーマとしたガイドルートの造成などである。次年度（2020 年度）以降、そうした活動に本格的に着手するにあたり、まずは日本における野生動物観察ツアーの現状について把握する必要があり、そのためにこのレポートを作成した。

日本列島は南北に細長く、気候的には亜熱帯から亜寒帯まで存在する。さらに列島の周囲には、南西諸島や小笠原諸島など多くの孤立した島嶼が点在している。山地や丘陵は国土の 70%を超え、そのほとんどが森林に覆われ、中部地方には標高 3000m クラスの高山も連なっている。こうした豊かな自然環境に恵まれているゆえに、国土が狭いわりには多様な生物相が育まれ、日本には現在約 130 種類の哺乳類が生息している。

「日本における野生動物観察ツアーの現状」といっても、地域によって自然環境や生息する野生動物、またそれらの保護管理体制は異なる。全国各地の現状を網羅的に調査することは時間的、予算的にも困難であったため、まずは調査対象のエリアを日本アルプスの山々への玄関口であり、外国人観光客も数多く訪れている「上高地」と「立山」に絞り、取材・調査を進めた。**「Ⅰ　上高地・立山における現状の調査」**は、両エリアにおける野生動物の保護管理体制の実態や、ネイチャーツアー実施や訪日外国人対応の現状と課題についてまとめている。

「Ⅱ　ほかの地域での特筆すべき事例」では、多彩な野生動物ウォッチングツアーを実施している軽井沢の「ピッキオ」や、公共施設ながら斬新な展示などで話題を集め、訪日外国人対応にも力を入れている高尾の「TAKAO 599 MUSEUM」などを先進事例として紹介。また、**「Ⅲ　アメリカの国立公園における野生動物観察」**では、野生動物の保護管理体制や観察のための仕組みが確立されているアメリカの事例からヒントを得るべく、同国の国立公園の特徴やネイチャーツアーの現状、参加者の安全管理対策をまとめた。

「Ⅳ　野生動物などの観察ツアーおよび情報発信の可能性の検討」は本レポートのまとめとして、Ⅰ～Ⅲの取材・調査を通じて見えてきた課題や今後に向けた展望を述べている。

本レポートが、日本における野生動物観察ツアーの開発や改善に多少なりとも寄与することを願っている。

目　次

はじめに　.....01

Ⅰ　上高地・立山における現状の調査　.....05

1　上高地　.....05
（1）エリアの特徴
a　概要――自然環境、観光客や登山者数など
b　生息する野生動物
c　野生動物（ニホンザル、ツキノワグマ）の保護管理の実態
d　野生動物の保護管理に関する課題
（2）野生動物観察などのネイチャーツアーについて
a　ネイチャーツアーの現状
b　参加者の安全管理対策
c　ネイチャーツアー実施に関する課題
（3）訪日外国人対応について
a　訪日外国人対応の現状
b　外国人への訴求ポイント
c　訪日外国人対応の課題

2　立山　.....14
（1）エリアの特徴
a　概要――自然環境、観光客や登山者数など
b　生息する野生動物
c　野生動物の保護管理の実態
d　野生動物の保護管理に関する課題
（2）野生動物観察などのネイチャーツアーについて
a　ネイチャーツアーの現状
b　参加者の安全管理対策
c　ネイチャーツアー実施に関する課題
（3）訪日外国人対応について
a　訪日外国人対応の現状
b　外国人への訴求ポイント
c　訪日外国人対応の課題

Ⅱ　ほかの地域での特筆すべき事例 24

1　軽井沢「ピッキオ」 24
（1）ルーツとビジョン　～エコツーリズムで未来の森や生き物を守る～
（2）多彩なツアー　～大切なのは、動物たちを disturb しないこと～
（3）ツキノワグマ保護管理　～クマとの共存を目指す～
（4）経営の観点から　～事業の継続性をいかに実現するか～
（5）何を伝えるか　～「野生動物を見た」で終わってほしくない～

2　高尾「TAKAO 599 MUSEUM」 32
（1）魅力的な空間を生み出すデザイン
（2）ミュージアムを作った人々
（3）訪日外国人対応
（4）「興味・発見・満足」という流れ

3　そのほか 38
（1）知床五湖
　a　概要
　b　グリーンシーズンの利用
　c　厳冬期の利用
（2）尾瀬
　a　概要
　b　尾瀬地区のクマ対策について
　c　尾瀬ガイドの認定について

Ⅲ　アメリカの国立公園における野生動物観察 43

（1）アメリカの国立公園の特徴――概要と日本との比較
　a　管理体制
　b　面積など
　c　職員・レンジャーの位置付け、ボランティア制度
　d　ビジターサービス
（2）野生動物の保護管理体制
　a　国立公園内における自然の把握とモニタリング
　b　野生動物の保護管理と安全対策
（3）ネイチャーツアーの現状
　a　国立公園スタッフによるレンジャープログラム
　b　民間ガイド会社との提携
　c　個人での動植物観察に対するサポート

（４）アメリカの国立公園から学ぶこと
ａ　野生動物観察における保護と管理の考え方の成熟
ｂ　ビジターセンターの充実
ｃ　ホームページの充実
ｄ　専門家としてのレンジャーの育成とマンパワー

Ⅳ　野生動物などの観察ツアー
および情報発信の可能性の検討（まとめ）　.....53
（１）野生動物観察をテーマとしたガイドルート造成の可能性
（２）訪日外国人対応と情報発信について

資料１　野生動物の観察に適したエリアと拠点施設　.....56

Ⅰ　上高地・立山における現状の調査

１　上高地

以下の上高地地区の現状については、一般財団法人自然公園財団上高地支部の主任・櫻井知寛氏、同野生動物対策専門員・香取草平氏への聞き取りをもとにまとめた。

（１）エリアの特徴

ａ　概要――自然環境、観光客や登山者数など

槍・穂高連峰への登山口である上高地は、中部山岳国立公園の一部であり、国の文化財（特別名勝・特別天然記念物）にも指定されている。梓川沿いの平坦部の標高は約 1500m（大正池 1492m～横尾 1620m）で、4 月下旬～11 月中旬の観光シーズンには多くの観光客や登山者で賑わう。

上高地へ入る唯一の車道である県道上高地公園線は、通年マイカー規制が行われ、シーズン中に上高地に入るには、松本方面からは沢渡駐車場、高山方面からは平湯あかんだな駐車場でシャトルバスまたはタクシーに乗り換える。また、夏から秋にかけての週末を中心に、路線バスを除くバス（観光バス、マイクロバス）の上高地へ乗り入れが制限される「観光バス乗り入れ規制日」が設けられている。マイカーやバスによる排気ガスの影響を最小限に止めてきたことで、上高地では動植物の営みや、空気や水の美しさが保たれてきた。

近年の上高地の利用者数は年間 120 万人ほど（※1）。うち外国人利用者数は、自然公園財団上高地支部の調査では 26 万人ほどと推計。上高地インフォメーションセンター入館者の国籍割合（※2）は、日本人観光客 73%に対して、アジア系観光客は 18%、欧米その他からの観光客は 9%。その内訳を見ると、アジア人観光客ではタイ、台湾、香港が多く、欧米人観光客ではイスラエル、フランスが特に多かった。

※1　『平成 30 年観光地利用者統計調査結果』（長野県観光部山岳高原観光課）より

※2　一般財団法人自然公園財団上高地支部調べ

ｂ　生息する野生動物

上高地に生息する野生哺乳動物としては、ツキノワグマ、ニホンザル、ニホンアナグマ、ホンドオコジョ、ニホンリス、ホンドダヌキ、ニホンノウサギ、ホンドギツネ、ヤマネ、ニホンカモシカなどが確認されている。また、これまで北アルプスではニホンジカの生息は見られなかったが、近年オスの個体が地区内で広く目撃されている。

以下に、上高地のニホンザルとツキノワグマの特徴について述べる。

【ニホンザル】

・ニホンザルは、ヒト以外では最も高緯度に生息し、寒冷地に適応した珍しい霊長類である。緯度は青森の下北半島が北限となるが、年間の平均気温を見ると上高地は札幌よりも寒く、それゆえ上高地のニホンザルは〝もっとも寒い地域で生息するサル〟だと言える。

・現在、上高地には 4 つの群れがあると言われ、頭数は 200 頭以上だと推測されている。

・巣を持たずに遊動生活を送っており、8 月～9 月には標高 3000m 付近まで〝登山〟する

こともある。こうした登山行動は、上高地のサルと槍ヶ岳のサル以外では見られないユニークな特徴である。
・人間に餌付けされることなく、季節に応じて獲れるもの（春は新芽、夏は小さな昆虫、秋は木の実、冬は木の枝や皮など）を食べて暮らしているという点で、自然本来のサルの姿が観察できるのも上高地の特徴である。
【ツキノワグマ】（※食性については、一般的なツキノワグマの食性を記述）
・北アルプスのクマは、夏は標高 2000m台の亜高山帯に生息し、秋には食料となるミズナラの樹林が広がる標高 1600～1800m以下の山地帯（本州の中部山岳では標高 700～1700mの地区）へと下りてくる。つまり、標高 1500mの上高地はクマの通り道となっている。
・食性は、植物性に偏った雑食性。春には草本類や木本類の新芽・新葉、前年度に落ちた堅果類（ブナ類・ナラ類）、夏には草本類や液果類（サルナシ、ミズキ、アケビなどの果実）、アリやハチなどの昆虫、秋には冬眠に備えて脂質・炭水化物に富む堅果類（ミズナラなどの実）を食べる。

c　野生動物（ニホンザル、ツキノワグマ）の保護管理の実態

【保護管理体制】

上高地は中部山岳国立公園の一部であり、その管理は環境省の上高地管理官事務所所属のレンジャー（国立公園管理官）およびアクティブレンジャーと、公園管理団体に指定されている一般財団法人自然公園財団上高地支部が行っている。

拠点施設は**「上高地インフォメーションセンター」**と**「上高地ビジターセンター」**の 2ヵ所。どちらも環境省の施設だが、管理・運営は自然公園財団上高地支部が担っている。自然公園財団上高地支部の事務所や環境省の管理官事務所はインフォメーションセンター内にある。

野生動物の保護管理に関わる人員は、上高地の管理業務全般に携わるレンジャー1 名とアクティブレンジャー2 名、自然公園財団上高地支部の野生動物専門員 1 名（香取氏）の計 4 名。日常的な業務（後述）はアクティブレンジャー2 名と香取氏の計 3 名で行っているが、アクティブレンジャーはそのほかの業務も並行して行っているため、上高地で野生動物対策を専門として活動しているのは実質的に香取氏 1 名のみとなる。

そのほか上高地の野生動物の専門家として、信州大学農学部の泉山茂之教授がいる。ツキノワグマが出没した際などは、専門家である泉山氏と協議して対応に当たることが「上高地地域ツキノワグマ対策実践マニュアル」（後述）で決まっている。

【日常的な業務】

上高地で行っている、ニホンザルとツキノワグマの保護管理に関する日常的な業務は
①ニホンザルの巡視・監視・追い払い
②ツキノワグマの巡視・監視・注意喚起
③利用者（観光客や登山者）への普及啓発活動
である。

①については、2007 年頃から上高地では「人間とサルとの距離感（近づきすぎ）」が問題となっている。以来、地域を挙げてサル追いが行われ、香取氏も野生動物対策専門員とし

てテレメトリ調査（※3）による群れの位置の把握や、サルと人間の距離が近づきすぎているときにはエアガンを使った追い払いを実施している。

②は、巡回中にクマを目撃したり、利用者から目撃情報が寄せられたときは、「熊目撃情報」の掲示の更新をして利用者への注意喚起を行う。掲示は、各公衆トイレ、ビジターセンター、インフォメーションセンターなど人目につきやすい場所に 14 ヵ所設置している。

③の普及啓発活動は、巡回中に利用者に直に野生動物に対する注意喚起（エサを与えない、近づきすぎない）や解説（追い払いをする目的）などを行っているほか、2019 年は新たな試みとしてビジターセンターで野生動物に関するミニトーク（レクチャー）を試験的に計 7 回（クマ 1 回、サル 6 回）実施した【画像Ⅰ-1】。また、「野生動物にエサを与えない」などの注意喚起を行うポスター【画像Ⅰ-2】をトイレやホテルに掲示している。

【画像Ⅰ-1】ミニトークの告知ポスター

【画像Ⅰ-2】注意喚起のポスター

【ツキノワグマ対策】

ツキノワグマ対策として、十数年ぐらい前から専門家の指導の下、ホテルや山小屋から出たゴミは堅牢な金属製ゴミ箱に入れることが徹底され、ゴミによってクマを誘引しないように努めてきた。

ツキノワグマの出没が確認された場合には「上高地地域ツキノワグマ対策実践マニュアル」に従い、出没レベルを 5 段階で判定。それぞれのレベルに応じた対応策を取ることが決まっている。対応内容は次ページの「ツキノワグマ出没レベル別の対応内容」を参照。

2019 年はクマの出没が例年に比べて多く、大正池～横尾のエリアでの目撃件数（4～11 月）は 178 件と、前年に比べて 3.8 倍も増加した。目撃地点は上高地全域にわたっている。そのうちの数件は、明神公衆トイレや小梨平キャンプ場など多くの人が滞在もしくは行き来する場所（利用集中区域）で出没し、小梨平キャンプ場では 5m ほどの至近距離で目撃されている。

ツキノワグマ出没レベル別の対応内容

出没レベル	レベル判定基準	対応内容
レベル 1	・利用集中地区外での通常出没 例：徳沢周辺での出没	・必要に応じて監視員が巡視する。 ・公園利用者に注意を喚起する。 ・必要に応じて各公園事業施設に情報を発信する。
レベル 2	・利用集中地区内での通常出没 例：田代湿原周辺での出没 小梨平周辺での出没	・監視員が巡視する。 ・公園利用者に注意を喚起する。 ・各公園事業施設に情報を発信する。 ・注意標識を設置する。
レベル 3	・利用集中地区外での連続的な出没 例：徳沢周辺での連続的な出没	・監視員が巡視する。 ・公園利用者に注意を喚起する。 ・各公園事業施設に情報を発信する。 ・注意標識を設置する。 ・専門家と対応を協議する。
レベル 4	・利用集中地区内での連続的な出没 ・施設敷地内での出没 例：小梨平周辺での連続的な出没 施設敷地内のゴミ捨て場への出没	・監視員が出没現場の確認及び巡視を行う。 ・公園利用者に注意を喚起する。 ・各公園事業施設に情報を発信する。 ・注意標識を設置する。 ・専門家及び各関係者と対応（捕獲など）を協議する。
レベル 5	・施設敷地内での連続的な出没 例：ゴミ捨て場への連続的な出没 キャンプ場への連続的な出没	・監視員が出没現場の確認及び巡視を行う。 ・公園利用者に注意を喚起する。 ・各公園事業施設に情報を発信する。 ・注意標識を設置する。 ・専門家及び各関係者と対応（捕獲など）を協議する。 ・必要に応じて出没施設周辺を一時立ち入り禁止とする。

出典：「上高地地域ツキノワグマ対策実践マニュアル」（環境省）

明神公衆トイレ周辺に出没したときは、警察との協議のうえ、香取氏の判断で半径 20～30mほどの範囲内の通行・立ち入りを規制し、香取氏、アクティブレンジャー1 名、警察官 2 名の計 4 名で観光客の誘導などを実施。河童橋近くの集団施設地区で出没したときも、クマの動きに応じて適宜通行規制エリアを設けて、クマが森の奥へと離れていくのを待った。小梨平キャンプ場では、クマの出没が確認されて以降、誘引の危険がある調理器具（BBQ コンロ、鍋など）の夕方（18 時 30 分）までの返却を徹底し、夜間屋外に食べ物、食べ残し、

ゴミ、においの残った食器や鍋などを放置することを禁止する措置がとられた。ビジターセンター主催の「星空観察会」（9 月 22 日開催予定）は、クマの出没が多かったため、安全を考慮して中止となった。

レベル 4 以上と判定され、ワナを設置して捕獲したクマは 3 頭。いずれも集団施設地区で捕獲をされた。捕獲後は、遠くの山林に放獣している。

※3　テレメトリとは、野生動物の身体に発信機を装着し、地上のアンテナなどとの間で送受信される電波情報から動物の移動を追跡する技術

d　野生動物の保護管理に関する課題

ニホンザルとツキノワグマについて、現状で次のような被害や課題がある。

【ニホンザル】

□サルとの距離感（近づきすぎ）

現時点では、たとえば日光のサルのように人に対して攻撃をしたり、食べ物を奪ったりする問題行動は顕著になっていないが、威嚇をされた利用者が転倒してケガをするなどの間接的な人的被害は起こっている。また、距離が近く、サルが人間のことを警戒していない状況で、人間がエサを与えるなどしてサルが人間の食べ物の味を覚えてしまうと、日光のサルのように威嚇もせずに突然、人の食べ物を奪ったり、襲ってくるといった深刻な状態になる恐れもある。

そのため、香取氏がサルの追い払いや利用者への注意喚起を行っているが、依然としてサルに近づいて写真を撮ったりする観光客は多く、サルとの関わり方についての普及啓発が十分に進展していない。

□食害

建物の木材をサルが食べる「食害」も起こっている。明神の穂高神社奥宮は深刻な食害に遭い、現在は金網で覆っている。ホテルや山小屋の建物も被害を受けている。

周囲に自然の樹木があるのに、なぜわざわざ建物の木材を食べるのか。その理由は定かではないが、上高地全域ではなく、局所的に起こっていることなので、「一過性の現象であり、ある集団の中でこのような嗜好を持つ個体が同時多発的に発生しているのではないか」と香取氏は推測する。

【ツキノワグマ】

□人の危険な行動

2019 年は、クマの出没が多かった一方で、利用者の危険な行動も多かった。たとえば、7 月に子熊出没の通報を受けて、香取氏が目撃情報のあった現場へと向かうと、園路の脇に 2 頭の子熊がいて、複数の利用者が写真を撮っていた。すぐに利用者に声をかけて子熊から離れるように誘導したうえで、まわりを観察すると 20m ほど離れた笹の中で興奮した親熊がこちらを見つめている姿を発見した。しばらく静観していると、親熊はこちらを威嚇するようにして子熊たちを回収して去っていったが、子熊の撮影が続いていたら親熊をさらに刺激して、人身事故が起こってもおかしくはない状況であった。

以上のような野生動物への近づきすぎの問題は、サルの人馴れ、クマの出没の増加など動物側の事情もあるが、「サルやクマを見かけたら近づかない」という人間側の行動を徹底することで、ほとんどの場合は回避できるし、自分たちの身の安全を守ることもできる。

野生動物に遭遇したときに利用者が適切な行動をとれるかは、正しい知識の普及啓発が鍵となる。ただ、その普及啓発活動においても課題がある。

第一の課題は「マンパワーの圧倒的な不足」。

前項で述べたように、上高地の野生動物対策を専業で行っているのは、香取氏のみである。2019 年に試験的に実施した野生動物に関するミニトークは、利用者にクマやサルのことを知ってもらい、行動改善を促す効果があると手ごたえを感じているが、1 回の開催で集められる利用者はせいぜい 40 名程度。2019 年は合計 7 回実施し、来年以降はもっと数を増やしていきたいと考えてはいるものの、120 万人という上高地の利用者数を考えれば、その広がりは極めて限定的だ。また、回数を増やすといっても、香取氏には日ごろの巡回などの業務もあるため、限界がある。

これまでもポスターを掲示して注意喚起を行ってきたが、視覚的にわかりやすいデザインに変更したり、掲示場所を工夫するなどして、より広く周知ができる方法を模索している。SNS の利用も検討はしているが、「どうすればより多くの人に必要な情報が拡散していくのか。その具体的なアイデアは持てていない」（香取氏）そうだ。

第二の課題は、訪日外国人対応ともつながるが、上高地には世界各国から 20 万人以上の外国人観光客が訪れるため、「国によって、動物に対する考え方や常識が異なり、普及啓発の切り口を変えていく必要性がある」こと。

たとえば、欧米系の人はスノーモンキー（長野県／地獄谷野猿公苑）のイメージが強いため、サルは人間に近く、近くで写真を撮ることは問題ないと考えている人が多い。そうした外国人には、スノーモンキーは餌付けされており、自然本来の姿で生きる上高地のサルとの違いから説明する必要がある。また、アジア系の文化圏の人は、野生動物にエサをあげることをよいことだと認識している人が多いため、餌付けすることのマイナス面を伝えなければならない。

普及啓発に関する上記の課題を解決するためのひとつの方法として、添乗員への普及啓発というアイデアがある。上高地は観光バスによる団体観光客が多いので、添乗員が野生動物についての正しい知識を持ち、利用者への啓発を行ってくれることが「上高地の客層を考えると、もっとも効率のいい普及啓発になる」と香取氏。しかし現状はむしろ逆で、「サルが見れる」とクライアントに宣伝し、ツアー客の近くで香取氏が追い払いをすると文句を言う添乗員もいるという。

「『サルが近くにいたら、こう行動すべき』『近づきすぎてはいけない』などの注意喚起を添乗員から行ってもらい、野生動物対策の一翼を担ってほしいですね」

そう香取氏は訴える。

（２）野生動物観察などのネイチャーツアーについて

ａ　ネイチャーツアーの現状

上高地では現在、野生動物観察を主目的としたツアーは実施していない。

ビジターセンター主催で 2019 年に実施したネイチャーツアーは下記通り。

ツアー名	実施回数、コースなど （実施実績は 2019 年のもの）	所要時間	参加費
ガイドウォーク	毎日開催。明神池コースと大正池コースがある	2 時間	500 円
春のバードウォッチング	5、6 月の日曜日に計 2 回開催。明神往復	5 時間 30 分	1000 円
徳沢フラワートレッキング	5、6 月の土曜日に計 2 回開催。徳沢まで	3 時間 30 分	1000 円
夏の早朝バードウォッチング	7 月の土日祝に計 7 回開催。小梨平にて	1 時間 30 分	500 円
上高地シダ・コケ植物観察会 2019	9 月の日曜日に計 1 回開催。明神往復	5 時間 30 分	1000 円
樹木観察会	9 月の日曜日に計 1 回開催。大正池まで	3 時間	1000 円

2019 年 11 月には、日本山岳ガイド協会のガイド研修のため、香取氏が野生動物観察をテーマとしたコースを設定して、試験的なツアーを実施した。

ルートは、インフォメーションセンター～明神の往復。往路では梓川右岸、復路では左岸を歩いた。サルの食性や習性がわかるポイントや、ツキノワグマが好む場所や実際に目撃情報があったポイントなどをあらかじめ定めておいて、その場所に来たらガイドが解説するスタイルを採った。

ガイド研修だったため、一般のクライアントはいなかったが、前日にホテルで呼びかけて興味をもってくれた欧米人夫婦が参加。実際に動物を見ることはできなかったが、上高地のサルやクマの生態についてガイドから説明を受けながら散策ができて、満足している様子だった。

b　参加者の安全管理対策

上高地では野生動物観察ツアーの実施実績はないが、試験的なツアーを通じて、参加者の安全管理対策として有効だと香取氏が感じたことを以下にまとめる。

まずは「事前レクチャーの実施」。

何も知識がないまま散策中にサルを見かければ、できるだけ近づいて写真を撮ったりしたくなるだろう。そうした無自覚に野生動物に接近するクライアントに対して、ガイドが現場で一方的に「離れてください」と注意をすれば、クライアントの不満にもつながりかねない。また、突然クマに遭遇すれば、思わず大声を出してしまい、かえってクマを刺激してしまう危険性がある。

ツアー出発前にレクチャーを実施して、野生動物の生態や出会ったときにどう行動すべきかを知っておけば、参加者一人一人が気を付けて行動ができるし、仮に不注意で近づきすぎてガイドから注意を受けたとしても素直に納得し、ガイドの指示に従うことができる

のではないだろうか。

また、「ツアー中の解説であえて生々しい話を入れること」も参加者への注意喚起や意識向上の効果があるのではないかと香取氏は感じている。

たとえば、試験的なツアーでは、上高地の園路でのクマの親子との遭遇の話をして、それがいかに危険な状況であったかを解説した。あえて怖い話、生々しい話をすることで、参加した欧米人の夫婦は「日本のツキノワグマは危険なのか？」と真剣な興味を持ってくれ、自分たちが「クマの生息地にいること」を強く認識してもらうことができたという。

「野生動物は本質的にコントロールできないので、『これをやれば絶対安全』という方法はありません。しかし、『これだけはしてはいけない』というルールはあります。たとえば、『クマを目撃したら大声を出さない』などです。そうしたことを事前にツアー参加者に伝えておくことは必要だと思います」（香取氏）

c　ネイチャーツアー実施に関する課題

野生動物観察を主目的にツアーを実施する場合、最大の課題はやはり、「食性や習性などから遭遇しやすい場所はわかったとしても、そこに行けば必ず見られるわけではない」（香取氏）ことだろう。実際、試験的なツアーでも、2 日にわけて 2 回ツアーを実施したものの、1 度も野生動物を見ることができなかった。

ルートに関する制約も大きい。上高地であれば、梓川両岸にそれぞれ 1 本ずつ園路が通っているだけなので、そのルート上に野生動物が出てきてくれないかぎりは観察もできない。ルートの問題は上高地に限った話ではないが、森林や山の中を自由に動き回れる野生動物に対して、基本的に登山道しか観察ルートが取れない人間はあまりにも不自由であり、遭遇率を高めることは難しい。

そのため、現時点で上高地において野生動物に関するツアーを実施するのであれば、「試験的なツアーでもそうしたように、野生動物の習性や食性がわかるようなポイントを巡る内容が現実的」というのが香取氏の見解だ。

動物との遭遇率を高めることが難しいのであれば、その分、動物を見られなかったとしても参加者に満足感を与えるガイディングが不可欠となる。

野生動物そのものとは遭遇できなくても、野生動物の痕跡として「食痕」や「糞」、冬であれば「足跡」などを見せることはできる。調査用の自動撮影カメラなどで撮った映像があれば、ツアーにタブレット PC を持参して、たとえばハルニレの木の前で「ハルニレを食べるサルの映像」を見せれば、より臨場感を持ってもらうことはできるだろう。実際、軽井沢の「ピッキオ」（Ⅱ／１　軽井沢「ピッキオ」を参照）のネイチャーツアーでは、タブレット PC でけもの道を通る動物たちの映像をツアー中に見せてもらった。また、動物の毛皮や足形などの小道具も有効だ（Ⅰ／２「立山」の事例では、実際にそうした小道具を教材として使用していた）。

そうした「動物が見られなくてもクライアント楽しませるコツ」はまさにガイドの腕の見せどころであり、野生動物に関するツアーを実施するにあたっては不可欠の要素となる。

（３）訪日外国人対応について

ａ　訪日外国人対応の現状

上高地の施設（インフォメーションセンター、ビジターセンター）や WEB ページなどの多言語対応の状況は以下の通り。

□施設の展示……常設の観光情報（登山、温泉、食事などの情報）や自然解説の展示は英語併記。登山情報は、外部の韓国語が堪能な人にボランティアで翻訳をしてもらい、韓国語も併記している。

□パンフレット……外国語のパンフレットは英語版のみ。

□スタッフ……英語のみが対応可能。

□WEB ページ……ビジターセンターのホームページ（https://www.kamikochi-vc.or.jp/）があり、英語のほか、繁体中文、簡体中文、韓国語に対応。上高地観光旅館組合が作っている「上高地公式ページ」（https://www.kamikochi.or.jp/）も英語、繁体中文、簡体中文、韓国語に対応している。

訪日外国人対応としては、上記のような施設・スタッフ・WEB ページの多言語化のほか、3、4 年前からビジターセンター主催で「外国人向けのトレッキングツアー」を企画している【画像Ⅰ-3】。コースはビジターセンター～岳沢小屋の往復で、所要時間は約 8 時間、参加費は 2500 円。これまでは年 1 回もしくは 2 回企画を組んで募集をかけた。ただ例年、新聞、ビジターセンターのホームページや Facebook に情報を出したり、各旅館施設などにチラシを配って募集はしているものの、応募者がおらず、催行実績はない。

【画像Ⅰ-3】外国人向けトレッキングツアーのチラシ

ｂ　外国人への訴求ポイント

前項で述べた「外国人向けの岳沢トレッキングツアー」は、特に外国人を意識した内容ではなく、日帰りで岳沢小屋を往復する一般的なツアー内容となっている。

上高地の自然、特に野生動物について、外国人観光客への訴求力をもつものとして、香取氏が挙げてくれたのは「ニホンザル」だ。

日本のサルといえば、地獄谷野猿公苑（長野県）のスノーモンキーが外国人観光客に人気が高い。たしかに温泉に浸かるサルの姿は愛くるしく、外国人観光客にとっては「日本でしか見られない風景」のひとつとして受け取られているかもしれないが、実際には「餌付けされ、完全に人馴れしてしまい、自然な姿を失った群れ」（香取氏）だという。かたや上高地は、四季折々の自然の恵みのみで暮らしている、本当の意味での「野生」のニホンザルが生息しているエリアである。「自然本来の姿のニホンザルが観察できる場所として、上高地は貴重だし、そこに魅力があると思う」と香取氏は語る。

ｃ　訪日外国人対応の課題

施設の展示、パンフレット、スタッフの多言語対応は英語のみとなっているが、「外国人観光客の方々は不自由なく過ごしているように見え、現時点では英語以外の外国語まで対応を広げる必要性は感じていない」と櫻井氏。アジア系や英語圏以外の欧米系のツアー客は英語が通じないことが多々あるものの、「添乗員さんがたいてい日本語あるいは英語を話せるので対応はできている」（櫻井氏）という。

しかし、外国人向けのネイチャーツアーのような、さらに踏み込んだ受け入れ体制を構築するにはまだまだ課題が多い。現状ではツアーを企画して参加者を募っても応募が 1 件もないことから、**「外国人への効果的な情報発信の方法」**が大きな課題である。

「訪日外国人がどんなページを見ているのか。どういうところから観光情報を得ているのか。そういった研究をして、広報面での工夫をしていかなければならないと思っています」（櫻井氏）

また、訪れた外国人に気持ちよく過ごしてもらうには、**「それぞれの国の文化や価値観に配慮した対応」**もしていかなければならない。

たとえば、上高地の公衆トイレは「チップ制」となっており、利用者に 100 円程度の協力を求めているが、もともとチップ文化がある欧米系の人からすると「それはチップなのか？　フィー（使用料）なのか？」と戸惑ってしまうという。香取氏は外国人観光客に説明するとき、チップではなく、「ドネーション（寄付）」という言い方をしているが、それでも欧米系の観光客から「これはドネーションではなく、フィーだ！」と怒られたことがあるそうだ。

２　立山

以下の立山地区の現状については、富山県立山カルデラ砂防博物館の学芸課長・飯田肇氏、同学芸員（生物担当）・白石俊明氏への聞き取りをもとにまとめた。

（１）エリアの特徴

ａ　概要――自然環境、観光客や登山者数など

立山は日本でもっとも北に位置する 3000ｍ級の山岳で、雄山（3003m）・大汝山（3015m）・富士ノ折立（2999m）の 3 つの峰を合わせて「立山」と呼ぶ。山の名称ではなく、一帯の地域を指して立山と呼ぶこともあり（本稿では、山の名称と区別するため、「立山地区」とする）、その範囲は「立山」から「室堂平」「天狗平」「弥陀ヶ原」「立山カルデラ」「美女平」「千寿ヶ原」まで広がる。立山地区は、中部山岳国立公園の一部でもある。

立山地区の自然環境を特徴づけるものとして、第一に「標高差」が挙げられる。千寿ヶ原の標高は 475m であり、室堂平は 2450m、立山山頂は 3015m と、2000～2500m の標高差があるため、地区内には夏緑広葉樹林帯、亜高山帯、高山帯という異なる植物帯が分布している。

2012 年にラムサール条約湿地に登録された雪田草原が広がる弥陀ヶ原、日本最大の落差

を誇る称名滝、今も火山ガスが噴き出す室堂平・地獄谷、立山火山の崩壊と浸食によって形成された立山カルデラ、立山東面の御前沢氷河など、「多様な自然環境が凝縮」していることも立山地区の魅力だ。また、世界的に見ても有数の「多雪地帯」で、春の立山観光の目玉である高さ 15～20m の雪の壁が大谷に形成されるのも、冬の間に大量の雪が降り積もるためである。

立山地区の利用者の数は、立山黒部アルペンルートの入込者数（※4）を見ると、2019 年は約 88 万人、2018 年は約 98 万人、2017 年は 93 万人と、近年は年間 90 万人前後で推移している。うち訪日外国人の数は、2019 年は約 24 万人で、内訳を見ると台湾がもっとも多く（12.5 万人）、香港（3.1 万人）、韓国（1.9 万人）、タイ（1.7 万人）が続く。ほかにインドネシアや中国からの訪日客が目立っている。2018 年には、過去最高の 26.3 万人の訪日客数を記録している。

※4　立山黒部貫光株式会社調べ

b　生息する野生動物

立山地区に生息する野生哺乳動物としては、ツキノワグマ、ニホンザル、ホンドオコジョ、ホンドキツネ、ニホンノウサギ、ホンドテン、ヤマネ、ニホンカモシカなどが確認されている。過去には生息が確認されていなかったニホンジカやイノシシの目撃も、2000 年頃から増えている。

また、室堂平周辺には 300 羽程度のライチョウが生息し、大きななわばりを形成。日本で最大の連続したライチョウの分布域となっている。ライチョウと同様に環境省レッドリスト絶滅危惧ＩB 類に指定されているイヌワシやクマタカの生息も確認されている。多くの野鳥も生息し、特に美女平のブナ林は野鳥の宝庫として知られている。

立山地区は地理的に大きな標高差があるゆえ、それぞれの動物の主な生息域も標高（植物帯）に応じて分かれている。たとえば、高山帯の室堂平にはライチョウやオコジョ、夏の弥陀ヶ原の湿原や立山の雪渓にはツキノワグマ、立山山麓から美女平や称名滝にかけてはニホンカモシカやニホンザルが多く暮らしている。

ただし、そうした生息域は一定ではなく、動物たちが活発に垂直移動していることも標高差のあるこの地区ならではのユニークな点だと言える。

オコジョは高山帯での目撃情報が多いが、標高 500～600m の立山山麓スキー場周辺でも数回、目撃されている。ヤマネは標高 1000～1500m ほどの森林が主な生息地とされているが、雄山山頂の社務所で発見されたこともある。野鳥も同様で、室堂平は鳥が渡りをする際に越えていく場所であるため、主に里地に生息する野鳥が標高 2450m の室堂平で観察できることもある。また、ツキノワグマは、春になると雪の下のやわらかい山菜を求めて、残雪を追って山を登っていく。秋には食料となる堅果類（ミズナラ、クリ、ブナなどの実）が多い山地帯へと下りてきて、猟期（11 月中旬～）になると猟師との遭遇を避けるように再び亜高山帯へと戻っていく。「標高差を上手く利用しながら、そのときどきでもっとも過ごしやすい場所を選ぶのが、立山のクマの暮らし方です」と白石氏は言う。

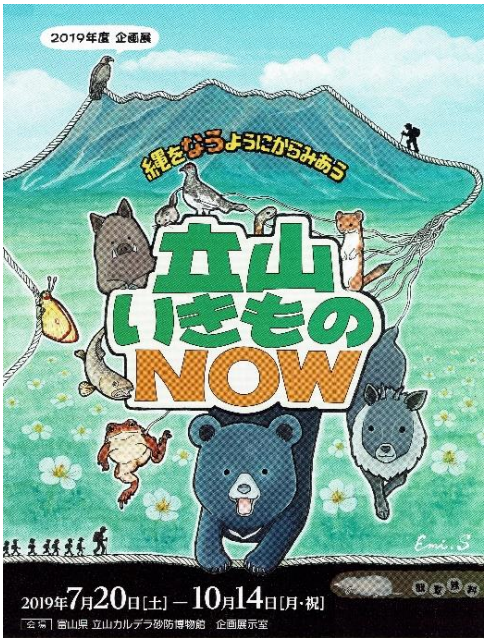
c　野生動物の保護管理の実態

【保護管理体制】

立山地区は中部山岳国立公園の一部であり、その管理は環境省の立山管理官事務所所属のレンジャー（国立公園管理官）1名とアクティブレンジャー2名が担っている。レンジャーやアクティブレンジャーが常駐するのは立山町の平野部に位置する**「立山管理官事務所」**（立山町前沢新町）で、立山地区の国立公園内には環境省直轄の施設はない。

現地施設として室堂平に**「立山センター」**があるが、これは富山県の施設で、県の自然保護課や富山県警察などの活動拠点となっている。立山センター内の**「立山自然保護センター」**は、立山地区の環境保全と自然教育の拠点施設として位置づけられ、館内の展示を通じて立山の自然に関する情報を発信するほか、フィールド情報の提供、県が認定する自然解説員（ナチュラリスト）による自然観察ツアーを実施している。なお、立山自然保護センターの管理・運営は、指定管理者である立山貫光ターミナル株式会社が行っている。

麓の千寿ヶ原にある**「立山カルデラ砂防博物館」**（県の施設であり、管理・運営は公益財団法人立山カルデラ砂防博物館）も、立山カルデラを中心に立山地区の自然に関する情報発信やさまざまなネイチャーツアーを実施している。2019年7月下旬から10月中旬には、立山地区の野生動物に関する普及啓発のため、企画展「立山いきものNOW」を開催した【画像Ⅰ-4】。



【画像Ⅰ-4】立山カルデラ砂防博物館企画展「立山いきものNOW」ポスター

野生動物の保護管理に関わる人員は、環境省のレンジャー・アクティブレンジャーと県の自然保護課となるが、いずれも専門で行っているわけではない。

野生動物を専門とする研究者は、哺乳類では立山カルデラ砂防博物館の白石氏のほか、「富山県自然博物園ねいの里」（富山市婦中町吉住）に2名在籍している。ねいの里は、富山県の鳥獣保護センターも兼ねており、県からの委託を受けて立山地区のニホンザルの調査や野生動物による人身被害・農作物被害の対策事業などを行っている。ライチョウに関しては、富山県雷鳥研究会がやはり県からの委託を受けて生息数や生態調査を行っている。

【ツキノワグマ対策】

富山県全域を対象とした「ツキノワグマ管理計画」や「ツキノワグマ対策マニュアル」は定められているが、立山地区に特化したマニュアルはなく、対策の取り組みも行われていない。それは地区内で野生動物との遭遇による大きなトラブルがほとんど起こっていないためだが、被害の可能性がゼロというわけではもちろんない。

2018年6月には、地元写真家の高橋敬市氏が立山ケーブル美女平駅からほど近い森の中でツキノワグマの襲撃を受けて、顔面に大ケガを負った。立山で撮影を続けてきた40年も

のキャリアを通じて、至近距離でクマと遭遇して襲われたのは初めての経験だったという。

2017 年 5 月の連休最終日には、弥陀ヶ原バス停付近に負傷したクマが現れ、あわやという事態になった。このクマは道路の両側の雪壁の上から転落し、逃げ場を求めて車道を駆け下りていたと思われるが、もし路上や近隣の建物内で人と遭遇していれば重大事故につながっていた可能性が高い。幸いなことに「バス発車直後で、バス停に人が少なかったこと」「近隣の山荘のトビラが閉まっていたこと」「団体との遭遇時、クマが身を隠せる林があったこと」などの偶然が重なったおかげで人身被害は出なかったが、「状況がひとつでも違っていれば、2009 年の乗鞍岳のような事故（※5）になっていたかもしれなかった」と白石氏は語る。

※5　シルバーウィーク初日の 2009 年 9 月 19 日、乗鞍岳の畳平（2702m）の駐車場や建物内で、1 頭のツキノワグマが 10 名（観光客 1 名、施設職員やパトロール員 9 名）を負傷させた人身事故。事故発生時、付近には 100 名以上の観光客がいた

d　野生動物の保護管理に関する課題

立山地区の野生動物の保護管理について、専門家の見地から白石氏は以下のような課題を挙げてくれた。

ひとつ目は**「保護管理を担う包括的な組織体制がないこと」**。

現行の体制では、環境省立山管理官事務所と県自然保護課が主体となるべきだが、前者は限られた人員で立山地区の国立公園の管理全般を担っているため、野生動物に特化することは難しいだろう。県は立山自然保護センターを拠点に情報発信や普及啓発活動を行っているが、ニホンザルやライチョウの調査、野生動物による人身被害・農作物被害の対策を外部組織に委託していることからもわかるように、保護管理業務を直接的かつ包括的に担えているわけではない。

委託を受けている外部組織も、ニホンザルやライチョウの調査など立山地区の野生動物管理の一部分を担っているだけである。前項で述べたように、立山地区の野生哺乳類の専門家は白石氏と自然博物園ねいの里に在籍する 2 名の計 3 名のみで、「現状把握のほんの一部を 3 人で担っているだけで、地区全体の状況はまったくカバーできていない。人手はまったく足りていない」と白石氏は語る。

「理想を言えば、たとえば知床の知床財団のような、野生動物の保護管理や調査研究、環境保全、環境教育や普及啓発活動などを一貫して行える組織を立山地区にも設けることだと思います」（白石氏）

二つ目の課題は**「立山地区独自の野生動物対策マニュアルがないこと」**。

前項でも述べたように立山地区では人と野生動物の遭遇によるトラブルがほとんど起きていないため、独自の対策マニュアルは作られていない。しかし、地区内はツキノワグマの生息域であり、人身被害発生の可能性がありうることは 2018 年の地元写真家の事故や 2017 年のバス停付近への出没からも明らかである。

「観光地は一度事故が起きれば、訪れる人が一気に減ってしまう。自分たちの観光資源を守るためにも、何か事故が起きてから対応するのではなく、事前に明確な対応マニュアルやルールを作っておくことは不可欠です。これまでの常識では、クマによる人身事故は『起きない』と多くの人は考えてきましたが、これからは『起きうる』ことを前提に関係者が

連携して対策を考えていくべきです」（白石氏）

関係者の常識を変えるためにはこれまで以上の普及啓発が必要であり、また観光客に対してはネイチャーツアーなどを通じて普及啓発活動を行っていくことが有効だと白石氏は考えている。

（２）野生動物観察などのネイチャーツアーについて

ａ　ネイチャーツアーの現状

室堂平の**「立山自然保護センター」**では、県認定の自然解説員（ナチュラリスト）による**「自然観察ツアー」**を実施している。主催は富山県自然保護課。

実施概要は以下の通り。

□実施期間……開館期間中の 4 月下旬～10 月中旬。例年、左記の期間のうち、GW 期間中と 7～10 月は毎日、5～6 月は金・土・日曜のみ、実施している。

□参加費……無料

□コース

（室堂平周辺コース）

・室堂平観察ツアー／1 時間

・みくりが池観察ツアー／2 時間

（弥陀ヶ原周辺コース）

・立山カルデラ展望台コース／1 時間

・弥陀ヶ原小回りコース／1 時間

・弥陀ヶ原大回りコース／2 時間

・獅子ヶ鼻岩展望コース／2.5 時間

ツアーは 1 日計 2~4 回の出発時間を設定。参加希望者は事前予約の必要はなく、出発時間前に指定の集合場所で受付をすることで参加できる。ガイド役の自然解説員は、県が開催するナチュラリスト養成講座（富山県自然保護講座）を受講し、所定の知識・技能を身につけたと認定を受けた人で、ボランティアで活動している。

この自然観察ツアーは、野生動物の観察をメインに謳っているわけではないが、室堂平周辺コースでは高い確率でライチョウの観察ができているという。

また、同センターでは自主事業（施設の指定管理者の立山貫光ターミナルが、県の承認を得て、自らの経費で実施するもの）として、外部組織から講師を招いて、立山地区の自然に関する**「講演会・観察会」**を年 5 回ほど実施している。参加費は無料。

2019 年度の実施実績は下記の通り。

日程	講演会・観察会	場所	定員
4 月下旬	「立山の雪」のお話と 「雪の回廊」観察会	雪の回廊	30 名
6 月上旬	「立山の雷鳥の生態を探る」のお話と 「雷鳥」観察会	みくりが池周辺	30 名
7 月下旬	「立山の高山植物」のお話と 「高山植物」　観察会	室堂平周辺	30 名

8 月上旬	石ころが語る立山の誕生 ～室堂平ジオツアーを楽しもう～	室堂平周辺	30 名
9 月上旬	「弥陀ヶ原火山」のお話と 「火山活動」観察会	みくりが池・エンマ台周辺	30 名

上記のうち、「『雷鳥』観察会」はライチョウの観察を主目的していることから、野生動物観察ツアーだと言えるだろう。

「立山カルデラ砂防博物館」でも、博物館主催のイベントとして「フィールドウォッチング」を実施している。2019 年度の実施実績は下記の通り。

日程	ツアー名	所要時間	参加費（大人／子供）	定員
5 月上旬	春の立山・雪の大谷	9 時間	5500 円／3000 円	40 名
6 月上旬	材木坂と美女平	5.5 時間	2500 円／1500 円	20 名
6 月中旬	弥陀ヶ原台地と称名滝展望	9 時間	4500 円／2500 円	20 名
8 月下旬	立山の氷河展望	10.5 時間	6000 円／3500 円	20 名
9 月上旬	室堂山とカルデラ展望	9 時間	5000 円／3000 円	20 名
9 月下旬	弥陀ヶ原とカルデラ展望	9 時間	4500 円／3000 円	40 名
10 月中旬	秋の称名滝と常願寺川砂防治水探訪	9 時間	3500 円／2000 円	20 名
2 月上旬	立山の雪を体験しよう	6 時間	2500 円／1500 円	20 名

上記のツアーのうち、「立山の雪を体験しよう」は、雪上に残された動物の足跡を観察したり、運がよければカモシカやノウサギの姿を目撃できたりと、野生動物観察の要素も含まれている。実施場所は、博物館周辺（常願寺川の河川敷など）や粟巣野スキー場内のクロスカントリーコースなどで行っている。

2018 年度からは立山地区の雪をスノーシューや立山かんじきで体験してもらう野外講座「はじめてのぶらかんじき」も開催【画像Ⅰ-5】。所要時間は 2 時間で、参加費は 1000 円。19 年度は 1 月、2 月の日曜日に計 6 回実施した。

【画像Ⅰ-5】野外講座「はじめてのぶらかんじき」のポスター

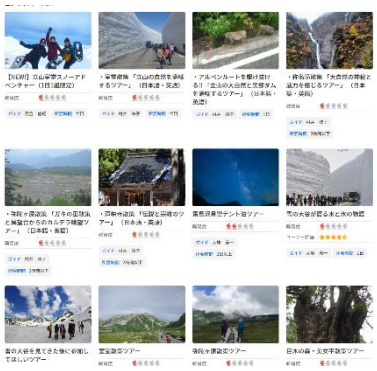
野生動物に関するネイチャーツアーを実施する場合、「動物を見られなかったとしても参加者に満足感を与えるガイディングが不可欠」と先述した（Ⅰ－1「上高地」P12 参照）。白石氏は、野生動物の存在を身近に感じてもらうための工夫として、さまざまな動物の毛皮や、粘土で作った足形【画像Ⅰ-6】などを準備し、ツアー中や終了後の振り返りのときに参加者に実際に触ってもらったりしている。毛皮は、雪の上に敷いて座ってもらったり、においを嗅いだり、首に巻いてもらったりもする。「そうした教材を効果的に用いることで、

参加者の興味関心が深まるし、満足度も高まると思います」と白石氏。ちなみに、教材として使う毛皮や足形は、ロードキルに遭った野生動物の死体から作っているそうだ。

【画像Ⅰ-6】ネイチャーツアーで使用している動物の足形（左）や毛皮（右）

民間事業者では、野生動物に特化しているわけではないが、「立山エコツーリズム研究会（通称・TATECO）」というガイドが集まった組織があり、さまざまなエコツアーを実施している。その中には「室堂 DE スノーシューツアー」など、高い確率でライチョウが観察できるツアーもある。なお、TATECO は、事務局が立山黒部貫光株式会社におかれ、ホームページ【画像Ⅰ-7】は立山黒部アルペンルートの公式サイト内におかれている。

TATECO ホームページ URL　https://www.alpen-route.com/tateco/



【画像Ⅰ-7】立山エコツーリズム研究会のトップページ（左）とツアー一覧ページ（右）

b　参加者の安全管理対策

【ツアーの安全管理】

立山カルデラ砂防博物館が主催するフィールドウォッチングでは、主にクマに対する安全管理対策として次のようなことを行っている。

持ち物としては、山に入るときには必ずヘルメット、ナタ、クマスプレー（パーティで

最低 2 本）を必ず携行している。
「クマによる事故例では、引き寄せられて顔をかじられたり、爪で顔面を叩かれるといった頭部周辺への攻撃がもっとも多く見られます。ヘルメットはそうしたクマの攻撃から頭部を守るためです。また、ナタはクマを逆上させる可能性があるとして賛否が分かれますが、襲われた人を助けることも想定して携行しています」（白石氏）
　ツアー開始前には、必ずクマの話をして、準備運動のあとに「クマ体操」を行っている。クマ体操とは、クマに襲われたときに身を守るための防御姿勢（うつぶせになって、両手で首を守る姿勢【画像Ⅰ-8】）の練習で、参加者にクマ役と人間役を交替でやってもらいながら、咄嗟に防御姿勢を取る動作を繰り返す。
「何も知らないより、多少でも意識や心構えがあれば、万が一クマに襲われたとしても、重体を重傷に、重傷を軽傷にすることはできると思います。ただ、クマに対して『怖いな』とも思ってほしくないので、少し冗談も交えながら、適度な緊張感を持ってもらえるような話し方を心がけています」（白石氏）

【画像Ⅰ-8】クマに襲われたときの防御姿勢

【外部組織への普及啓発】
　所属ガイドを対象とする TATECO の研修会に講師として呼ばれて、立山地区の自然（氷雪、地形・地質など）や歴史の話とともに、白石氏が上記のような野生動物の生態や安全管理対策について講習をすることもある。2019 年には環境省から委託を受けて、立山カルデラ砂防博物館が主催で 1 泊 2 日の研修会を実施して、そこに TATECO のガイドに参加してもらったりもした。
　野生動物観察の安全管理で大切なことは、まずはツアーの主催者やリーダーが野生動物の生態や行動習性に関する〝知識〟を持ち、いざというときに必要な〝装備〟を携行し、遭遇を回避するため、および遭遇したときの〝行動イメージ〟を持っておくことが不可欠である。主催者やリーダーが適切な知識と装備を持ち、行動ができれば、参加者への啓発も進み、ツアーの安全性も向上する。その意味で、白石氏のような野生動物の専門家による外部組織への研修は極めて有効な普及啓発だと言える。

c　ネイチャーツアー実施に関する課題
　立山カルデラ砂防博物館のフィールドウォッチングについて、内容的には「完成度は高いと思います」と飯田氏は語る。
「毎年の実施実績をもとに少しずつ改善を重ね、現在の内容になっている。博物館としてできるブラッシュアップはすでにできており、いい意味でマンネリ化しています」（飯田氏）
　ただ、課題もある。そのひとつが**「情報発信（周知・広報）の方法」**だ。
　ツアー内容には自信を持っており、実際に参加してくれた人の満足度は高いものの、十分な集客ができていない現実があり、その原因を「広報網の狭さ」だと考えている。
「都市部から来てくれた人などは、ツアーに参加して立山の自然に触れることで、すごく

喜んで興味を持ってくれます。日ごろ自然と接する機会の少ない人たちにもっとツアーのことを知ってもらえれば、参加者は増えると思いますが、博物館のネットワークにはそうした人たちは入っていません。ツアーの情報をもっと広めたいのですが、博物館単独では広報網に限りがあるのです」（飯田氏）

また、多くの人への普及啓発には、ツアーの実施回数を増やして、立山地区を訪れた人がツアーに参加できる機会を多くすることも重要だが、**「実施頻度」**にも限界がある。

「博物館の仕事は、フィールドウォッチングの企画・運営だけではありません。冬の間、毎週末『立山の雪を体験しよう』を実施しようと思っても、それをするだけの余裕がないのが実状です」（白石氏）

広いネットワーク（広報網）を持ち、集客力のある民間事業者に、博物館が積み上げてきたノウハウを生かしてもらい、ネイチャーツアーを企画してもらえば上記 2 つの課題は解決するかもしれないが、現時点ではそうした博物館と民間事業者の連携体制は構築できていない。

（３）訪日外国人対応について

ａ　訪日外国人対応の現状

立山自然保護センターと立山カルデラ砂防博物館では、以下のような多言語対応を行っている。

【立山自然保護センター】

□スタッフ……多言語翻訳アプリ「みえる通訳」（https://www.mieru-tsuyaku.jp/#）を導入。対応言語は、英語、中国語、韓国語、ロシア語、タイ語。主に展示機器操作や迷子対応に利用。

□施設の展示……1 階の映像ホール、3 階のモニター画面で「ライチョウ」や「高山植物」などのビデオ映像を 4 ヵ国語で放送。

□WEB ページ……簡易的な内容ではあるが、英語版ページを開設。

□パンフレット……英語、繁体中文、簡体中文、韓国語のフィールドガイドマップを用意。

【立山カルデラ砂防博物館】

□スタッフ……受付スタッフは英語のみ対応可能。

□パンフレット……英語、繁体中文、簡体中文、韓国語に対応。

□展示……映像ホールにおける 3D 映像の外国語音声レシーバー（英語、中国語、韓国語）の貸出。常設展示室の外国語解説タブレット（英語、繁体中文、簡体中文、韓国語）の貸出。

□WEB ページ……簡易的な内容ではあるが、英語版ページを開設。

さまざまなエコツアーを実施している TATECO では、ホームページの英語対応のほか、所属ガイドの中に英語対応ガイドが複数人在籍している。

ｂ　外国人への訴求ポイント

現状では、訪日外国人をターゲットにしたツアーは実施していないが、「立山地区には、さまざまな国からの旅行者の多様なニーズを満たせるポテンシャルは十分にあると思う」と白石氏。

そもそもの大前提として、外国人旅行者が求めているものは「非日常」、つまり「自国にはない自然景観や文化、生き物との出会い」である。

立山地区にアジアの観光客が多いのは、やはり「雪の大谷」で豪雪地帯ならではの景観が見られるためだろう。アジア、特に雪の降らない東南アジア（タイ、インドネシア、シンガポールなど）の人たちの目には、高さ 15～20m の雪の壁がそそり立つ様は、まさに非日常的な特別な景観として映っているいるはずだ。

逆に、日本では特別天然記念物に指定され、立山地区の野生動物としてはもっとも人気のあるライチョウは、スコットランドなどでは狩猟対象であるため、「ヨーロッパの人たちにとっては観光的な訴求力をあまり持たないと思う」と白石氏は考えている。

「（１） ａ　概要――自然環境、観光客や登山者数など」の項で述べたように、立山地区には、3000m級の山岳、世界屈指の多雪、高山植物が咲き誇る湿地、日本最大落差の滝、火山活動による温泉、現存する氷河など、多様な自然環境が凝縮している。欧米人にとっては非日常の動物であるニホンザルをはじめ、さまざまな動物も生息している。また、立山は日本三大霊山のひとつに数えられ、立山信仰にまつわる神社や石仏などもあり、歴史・文化的な側面からのアプローチもできる。

「それぞれの国の人にとって魅力となる要素を抽出して、上手く広めていけば、日本を訪れた外国人の方たちにもっと興味を持ってもらえるのではないか。そのための素材は揃っていると思います」（飯田氏）

ｃ　訪日外国人対応の課題

立山地区にはさまざまな国から来た外国人を魅了する「素材」は揃っている。しかし、「それを広め、伝えてくれるガイドが少ない」（飯田氏）のが課題だ。

立山カルデラ砂防博物館のフィールドウォッチングやTATECOのエコツアーなど内容的には充実しているツアーもあるが、「しっかりと外国語対応ができているツアーとなると数は限られる」（飯田氏）という。

ガイド不足を解消するには、山での安全管理技術をすでに身につけた登山・山岳ガイドに、野生動物を含めた自然解説（インタープリテーション）のスキルと外国語対応のスキルを習得してもらい、訪日外国人の受け入れを行ってもらうのが理想ではある。とはいえ、一朝一夕で多くの人材を育成するのは現実的に困難であるため、「場合によっては、すべての役割を 1 人のガイドが担うのではなく、登山の安全管理、自然解説、外国語対応とそれぞれの役割を分担し、複数人のガイドが組んで外国人向けのツアーを作っていく方法もあり得ると思います」と飯田氏は語ってくれた。

Ⅱ　ほかの地域での特筆すべき事例

１　軽井沢「ピッキオ」

（１）ルーツとビジョン　～エコツーリズムで未来の森や生き物を守る～

＜ルーツは野鳥＞

株式会社ピッキオは、軽井沢を拠点に年間を通じて多彩なネイチャーツアーを開催している民間企業である。ピッキオのネイチャーツアーの中には「空飛ぶムササビウォッチング」「ワイルドサファリツアー」「カモシカに出会うトレッキング」といった野生動物観察ツアーも多い。

【画像Ⅱ-1】
ピッキオのホームページ

同社の前身が星野温泉（現・星野リゾート）の「野鳥研究室」であることから、取材前には「もともとは野鳥の調査・研究を中心に活動しており、そこから幅広いネイチャーツアーに事業を拡大したのだろう」と考えていた。だが、そのとらえ方は必ずしも正確ではなかった。

野鳥、がルーツであることは間違いない。

昭和初期の 1930 年代、「日本野鳥の会」創設者である中西悟堂は軽井沢に足しげく通い、この地を「日本三大野鳥生息地のひとつ」と紹介した。中西が常宿としていたのが、大正時代から軽井沢で旅館業を営んでいた星野温泉で、同温泉の 2 代目星野嘉助（星野リゾートの現代表・星野佳路氏の祖父）は中西に師事して、野鳥観察を楽しんだり、野鳥の保護活動に力を尽くした。そうした歴史を背景として、1974 年、星野温泉に隣接する森林が「国設野鳥の森」に指定。国設の森に指定されたのち、時期は定かではないが、星野温泉に「野鳥の森監視員」という森をパトロールしたり、野鳥の研究をする役職がおかれた。

現在のピッキオにつながる転機となったのは、1991 年の星野佳路氏の社長就任だ。

アメリカから帰国して星野温泉の代表に就くにあたって、佳路氏は「日本にもエコツーリズムを根づかせたい」というビジョンを持っていた。そのビジョンを実現する第一歩として、翌 92 年に設立したのが「野鳥研究室」なのである。

つまり、ピッキオの前身である野鳥研究室は、設立時のメンバーが野鳥の研究者で、主な活動のフィールドが野鳥の森であったことから、名称こそ「野鳥研究」を名乗っているが、根底には「日本におけるエコツーリズムの実現」という自然や生き物全般を対象とし

たビジョンがあり、現在見られるような多彩なネイチャーツアーへの事業展開も当初から思い描かれていた必然の動きなのである。

そうした観点から見れば、95 年に野鳥研究所を「ピッキオ」と改称し、ムササビ観察ツアー（現「空飛ぶムササビウォッチング」）を開始するなど、設立後わずか数年のうちに野鳥以外にネイチャーツアーの対象を広げていったのもうなずける。

＜ビジョンが人材を集める＞

本レポートのテーマである野生動物観察にかぎらず、どのような事業を行うにあたっても理念やビジョンは重要である。その組織がどんな理念やビジョンに基づいて活動するかによって、組織や事業の未来像は変わっていくし、人材も理念やビジョンへの共感が核となって集まってくる。

ピッキオのホームページ内の「ミッション」というページに記された文言を以下に引用したい。

> 《ピッキオ（picchio）とは、イタリア語でキツツキを意味します。森にくらす野鳥の名をもつ私たちは「森と森に生きる動植物を未来に残していきたい」と強く願っています。そのために私たちがなすべきことは何だろう。たどり着いた答えは「森の価値を高めること」でした。森には多様な動植物が暮らしている。そのことには意味がありプラスの価値をもたらすと、なるべく多くの人に実感してもらえるようにすることです。
>
> 私たちは、心躍る動植物との出会いをサポートし、そのおもしろさや不思議さにふれるネイチャーツアーを開催します。時には被害をもたらすこともあるツキノワグマについて、その行動を徹底的に調査し、彼らとの共存の在り方を提案します。そして森には未来に残す価値があることを日本国内はもとより世界に示していきます。》

「私自身もピッキオの理念やビジョンに魅かれて、ここに来たひとり」という広報担当の栁原千穂氏は次のように語る。

「私たちスタッフは、それぞれに『未来の森や生き物たちを守っていきたい』という想いを持っています。その想いを実現する手段としてエコツーリズムに可能性を感じ、信じているからこそ、働く場所としてピッキオを選び、日々頑張っているんです」

次項以降で詳述するが、ピッキオが多彩なネイチャーツアーを企画・運営したり、地域のツキノワグマの保護管理を担うことができているのも、多くの優れた人材がいるからこそだ。そして、彼らを結びつけているのが、佳路氏が思い描いた「日本にもエコツーリズムを根づかせたい」というビジョンなのである。

（２）多彩なツアー　～大切なのは、動物たちを disturb しないこと～

ピッキオでは現在、年間を通じて多彩なネイチャーツアーを実施している。

そのうち、野生動物の観察ができるツアーは以下の通り。

ツアー名	実施期間 ／実施頻度	料金	時間	定員
野鳥の森　ネイチャーウォッチング	通年／毎日 ※3 月下旬～11 月は 1 日 2 回	大人 2100～2500 円 子供 1000～1200 円	2 時間	20 名
けもの道ウォーキング	12 月～4 月上旬 ／毎日	5000 円	3 時間	7 名
空飛ぶムササビウォッチング	3 月中旬～11 月 ／毎日	小学生 2500 円 中学生～大人 3400 円 幼児（～6 歳）　無料	1 時間 30 分	30 名
ワイルドサファリツアー	4 月下旬～10 月 ／毎日	中学生～大人 4900 円 4 歳～小学生 3800 円	1 時間 30 分	6～20 名
早朝バードウォッチング	4 月下旬～5 月中旬／毎日	3500 円	2 時間 30 分	15 名
カモシカに出会うトレッキング	9 月末～10 月 ／5 回	1 万 8000 円	7 時間 30 分	2～5 名

野生動物観察以外では、「氷上の星空ウォッチング」「秘密のフラワーウォッチング」「親子のリバートレッキング」「氷瀑探訪」「絶景トレッキング　小浅間山」「たんけん！　はじめての森（春・夏・秋）」などがある。

活動拠点は 2 ヵ所あり、軽井沢星野エリア内にある「ピッキオ」と、軽井沢プリンスホテル内の「ネイチャーキッズ森の家」。森の家は、軽井沢プリンスホテルの施設で、管理・運営やプログラムの実施をピッキオが請け負っている。

2 つの拠点を合わせて、年間の利用者数は 4 万人ほどとなっている。

さらに、2019 年からは「ピッキオ知床」を立ち上げて、北海道知床でも事業展開をスタートさせている。その WEB ページには「日本はもとより世界に向けて、日本の自然の豊かさを発信してきたい」と書かれており、同社が知床でどんなネイチャーツアーを行っていくのか大いに期待したい。

＜高い遭遇率を実現できているのは？＞

ネイチャーツアーを実施するにあたって、ピッキオが重視しているのは「サービスとしての質の高さ」だ。

「エコツーリズムをビジネスとして、お客様から対価をいただいてツアーを行っている以上、サービスとしての質を向上させ、いかに満足度を高めるかは、常に意識しています」（柳原氏）

野生動物観察で顧客の満足度を高めるには、「実際に野生動物に出会えること」が最も効果的であることは言うまでもない。

ホームページ内のツアー紹介を見ると、

・空飛ぶムササビウォッチング……目撃率は90%以上(2018 年:97.8%／2019 年:97.8%)
・ワイルドサファリツアー……2018 年、2019 年の遭遇率は 98.9%
・カモシカに出会うトレッキング……目撃率は 100%

と、極めて高い遭遇率を謳っている。

当たり前の話だが、自然の中で生きる野生動物の行動を人間がコントロールすることは不可能である。にもかかわらず、これほど高い遭遇率を実現できているのは、

①動物たちの生態に精通した専門性の高いスタッフがいること
②長年にわたって軽井沢の動物たちを調査・観察し続けてきた経験の蓄積

という 2 つの要因が大きいという。

【画像Ⅱ-2】「空飛ぶムササビウォッチング」のツアー紹介ページ

また、筆者はピッキオのツアーに参加させてもらったが、観察対象となる生き物（そのときは主に野鳥）がいないときも、けもの道を行く野生動物の映像をタブレット PC で見せてくれたり、道端に落ちているクルミの食痕から小動物の食性を解説してくれたり、樹木に残されたクマの爪痕や熊棚（※6）の存在を教えてくれたりと、内容の密度が濃く、2 時間というツアー時間があっという間に過ぎていった。

野生動物を観察するだけでなく、それ以外の場面でも充実したインタープリテーションができるのも、「どのスタッフも自然観察の経験が豊富で、さまざまなフィールドサイン（野生動物の痕跡）を見つける目を持っている」（柳原氏）ためである。

社内向けの研修プログラムもあり、新人スタッフは一定の研修を受けたうえでインタープリターとしてデビューする仕組みも整えられている。

※6　ツキノワグマが樹上で木の実を食べたあと、折れた小枝が残されて鳥の巣のような形状になったもの

＜動物たちのとの距離感＞

ツアーを実施するにあたって、参加者の安全管理にも配慮している。具体的には、スタッフに対して基礎的な救命救急技術の講習を毎年実施しており、ハチなどの危険な虫や夏の熱中症などフィールドで遭遇しうるハザードへの対策も行っている。なお、ツキノワグマ対策については、次項で保護管理体制の話と合わせて詳しく述べる。

参加者の安全管理とともに、ピッキオのスタッフたちがツアーの際に細心の注意を払っているのが「動物たちとの距離感」だ。

観察のために野生動物に近づいたり、彼らの生息域に入っていくことは、野生動物に対して少なからず影響を与えている。人間の側のそうした行為が行き過ぎて、動物の生息を「disturb（妨害・邪魔)」することだけは「絶対にしてはいけないと思っている」と柳原氏は言う。

「ピッキオの事業の目的は、ネイチャーツアーを通じて一人でも多くの人に森や動植物の素晴らしさを実感してもらい、生き物や彼らが生息する自然環境を持続的に守っていくことです。

disturb しないことを突き詰めて考えれば、そもそも観察ツアーなんて行わず、手つかずのままにしておけばいいという話にもなります。しかしそれでは、自然や生き物の価値を、多くの人に伝えていくことができません。だからこそ、私たちは常に、動物たちの姿を見させてもらう一方で、彼らを守っていくにはどこで折り合いをつければいいのか、超えてはいけない一線はどこにあるのか、という議論をしています」（柳原氏）

ツアー中に動物に遭遇したときも、彼らの表情や仕草――耳がどう動いているか、鼻の穴がどう動いているか、といったことまで仔細に観察し、もし人間の接近や照明を向けられていることを嫌がっていると感じたら、ライトの位置を変えたり、ツアー参加者に離れてもらったりして、なるべく動物たちにストレスを与えないよう、disturb しないように気を付けて行動している。

「野生動物の観察をするうえで何よりも大事なのは、相手のこと、つまり動物たちのことをよく知り、彼らの立場に立って考え、行動することだと思います」と柳原氏。

何も考えずに観察ツアーを実施して、むやみに動物たちに接近すれば、彼らはストレスを感じて、どこか別の場所へ移動してしまうかもしれない。そうなれば、観察ツアーも成り立たなくなる。

人間の都合や思惑ではなく、動物の立場や視点に立って、判断して行動する。そうやって適切な関係性のバランスを保ててこそ、動物たちは今いる場所に居続けてくれるし、動物が一定の場所にいればこそ、人間は動物の姿を高い確率で観察することもできる。

「動物たちの持続性を考えることは、ひいては私たちのビジネスの持続性、つまり人間の側の持続性を考えることにもつながっていくんです」（柳原氏）

ピッキオのネイチャーツアーは、まさに「人間と動植物の共存」のうえに成り立っているのだ。

（３）ツキノワグマ保護管理　～クマとの共存を目指す～

＜発端は「見過ごせない」という想い＞

ネイチャーツアーとともにピッキオの事業の柱となっているのが、軽井沢地域のツキノワグマの保護管理である。

保護管理に着手しはじめたのは 98 年のこと。

「当時、軽井沢町のあちこちで、クマがゴミステーションを荒らしているという話が出ていました。ピッキオのスタッフはみな、生き物のことが好きでしたし、クマの生息地である森をフィールドに活動していたので、この地域のクマの動向を正確に把握して問題解決の糸口を探るため、独自にツキノワグマを捕獲して発信機をつけ、追跡調査をはじめたんです」（柳原氏）

調査結果などを軽井沢町とも共有しながら活動を続ける中で、00 年には町から正式にツキノワグマの保護管理事業を委託。02 年にはアメリカのベアドッグ養成機関 Wind River Bear Institute（WRBI）のキャリー・ハント氏を招き、2 年後の 04 年には日本初のベアド

ッグ（※7）を導入した。

以後、発信機をつけたクマが人の居住地域に近づいたときにはベアドッグによる追い払いを継続的に実施。ピッキオが保護管理に着手した98年頃には年間130件ほどあったゴミステーションへの被害は09年には0件となり、住宅地でのクマの目撃件数も減少している。

取材前、ピッキオがクマの保護管理に取り組んでいるのは、軽井沢をフィールドにネイチャーツアーを行う事業者として「ツアーの安全性を高めたい」からだろうと推測していた。だが、柳原氏によれば、いちばんの動機は「見過ごせない」という想いだったという。

クマによる物的・人的被害が拡大すれば、やがては地域の人々のあいだで「クマを駆除すべし」という声が高まり、クマの生存が脅かされてしまう。そんな事態に陥るのを何としても回避したかったのだ。

「私たちは、どんな生き物とも共存していきたいという理念をもって活動しています。地域で動物に関する問題が起きているのであれば、見過ごすことはできない。そんな想いが出発点にありました」（柳原氏）

話を聞いて驚いたのは、保護管理の活動をはじめた98年当時、ピッキオにはツキノワグマの専門家が一人もいなかったことだ。その後、クマを専門とするスタッフがメンバーに加わるが、活動の初期には外部の専門組織の協力を仰ぎながら、まさに手さぐりで捕獲や調査、居住エリアからの追い払いを行っていたという。まだ十分な体制が構築できていないにもかかわらず、保護管理に乗り出したことからも、「見過ごせなかった」という彼らの想いが真実であったことがよくわかる。

※7　クマの匂いや気配を察知するための特別な訓練を受けた犬。スタッフの指示に従い、大きな声で吠えたてて、クマを森の奥に追い払ってくれる

＜クマの住処に入る心構え＞

ツキノワグマの適切な保護管理ができていることは、当然ながらネイチャーツアーの安全性の向上にも寄与している。

「もともとツキノワグマは臆病な性格で、人の気配を察知したり、物音が聞こえてきたら、自ら離れていってくれる動物です。ただ、ゴミに餌付いたりしていると、ハイカロリーなものが容易に手に入る場所に執着をしたり、人が近づいても気にしなかったりと本来の性質とは異なる行動をします。その意味で98年頃は極めて危険な状況だったのですが、現在は異常な行動をするクマはいなくなり、基本的に大丈夫だと考えています」（柳原氏）

現在、軽井沢町では地域全体を細かく区分けして、それぞれの地区の特性に合わせてクマ対策を実施している。たとえば、住民の居住区域は追い払いの対象エリアで、もし発信機をつけたクマが近くにいる場合はベアドッグで追い払いを行っている。一方、ピッキオのネイチャーツアーのフィールドである野鳥の森などは「クマがいてもいいエリア」として、追い払いは行っていない。

もし発信機をつけたクマがツアーエリアにいることがわかったときは、その情報をスタッフで共有したうえで注意深く行動し、場合によってはクマがいる場所を回避するなどの対応をとる。あくまでもクマの動きを優先するのだ。

また、ツアー中に発信機をつけていないクマと遭遇する可能性もあるため、クマよけ鈴とクマスプレーを携行。クマの活動期に森に入るときは、事前にツアー参加者にクマの生

態や、万が一遭遇したときの対応について伝え、クマに対するイメージを持ってもらったうえでツアーをはじめるようにしている。
「ネイチャーツアーで人が入るからといってクマを森から追い出すのは、彼らの生息圏を侵すこと、まさに disturb になってしまいます。私たちが活動する森は、人の生活圏ではなく、クマの住処です。クマがいることが当たり前ですし、ツアーの参加者にも『ここからは彼らの住処なんだ』という心構えで森に入ってもらうことが大切だと考えています」（柳原氏）

（４）経営の観点から　～事業の継続性をいかに実現するか～

＜軽井沢という立地の恩恵＞

ピッキオは民間の企業である。「森やそこに生きる動植物を守る」という理念の下、どれだけ質の高いネイチャーツアーを実施しても、野生動物の保護管理を推進して地域社会に貢献しても、事業を通じてしっかりと利益を出さなければ、会社として存続できないし、事業の継続もできない。

92 年に野鳥研究室として設立されたピッキオは、10 年ほどは星野リゾート（旧・星野温泉）の一部署として活動しており、経営もその枠組みの中で行われてきた。しかし、業績は徐々に伸びて、2003 年に株式会社ピッキオとして独立した数年後にはピッキオ単体で収支の黒字化が達成できるまでに成長した。

エコツーリズムの可能性、すなわち日本においてビジネスとしてエコツーリズムが成立しうることを、自らの事業の成功によって証明したと言えるだろう。

では、経営面でこれまでどんな努力や工夫を重ねてきたのか。柳原氏は「自分たちにできること、やるべきことをひとつひとつやってきただけ」と語る。つまり、専門性の高いスタッフの豊富な知識や経験、軽井沢での長年の調査・観察を背景に、自然や生き物の素晴らしさが伝わる魅力的なエコツアーを企画すること。サービスとしての質を高め、顧客の満足度を上げていくこと。そうしたことを試行錯誤を重ねながら地道に積み重ねてきた結果、今のピッキオがあるのだという。

また、「軽井沢という立地の恩恵は大きい」とも話してくれた。

軽井沢は年間 850 万人以上が訪れる、長野県屈指の観光地である。さらにピッキオが拠点をおくのは、ホテルや温泉、レストランやカフェ、ショップなどが集まる星野エリアの一画。日本中から多くの観光客がさまざまな目的で訪れる中、「軽井沢の自然についてより深く知りたい」「美味しいものを食べたり、ショッピングをするだけじゃなく、ここでしかできない体験がしたい」という人の受け皿になっているのだろう。

広報・宣伝面では、ピッキオや星野リゾートの媒体・ネットワークを通じた情報発信のほか、軽井沢町や、提携している軽井沢プリンスホテルを経由した発信など、地域のつながりを活かした多彩なチャンネルを持っている。特に軽井沢プリンスホテルとの提携の影響は大きく、同ホテルの森の家の運営に関わるようになったことが集客数増加のひとつのきっかけになったそうだ。

＜ビジネスだからこその持続性＞

再三述べているように、ピッキオが目指すのは、森やそこに生きる動植物を〝持続的〟に守っていくことである。事業の持続性について考えたとき、ネイチャーツアーをビジネスとして展開する意義はより鮮明に浮かび上がってくる。

公共的な事業の場合、課せられた目的の実現を目指すことは同じだが、どうしても予算や補助金ありきの考え方になり、「いかに予算を適切に使うか」「いかに予算内に収めるか」に腐心しがちになる。そこからは「売上や利益を上げよう」「事業を拡大しよう」という発想は生まれにくい。また、事業の規模や内容、継続性も、予算や補助金の多寡や有無に左右されてしまう。

一方、ビジネスの場合、利益を上げなければならないというシビアな面はあるものの、利益を上げられるかどうかは事業に携わる人間のアイデアや努力次第だし、事業として上手く軌道に載せられれば、おのずと継続性も維持できる。将来的な収益が見込めるのであれば、先行投資をして人を増やして事業を拡大したり、個々人のスキルとアイデアで新しい分野にチャレンジすることもできる。もちろんビジネスにはリスクも伴うが、事業の成長性や持続性はビジネスとして行った方が可能性は広がるのではないだろうか。

また、ピッキオに専門性の高い優れたスタッフが数多く集まっているのも、ビジョンや理念に共感しているだけではなく、同社が企業として健全な経営を行い、社員の雇用を保障しているからだろう。

組織として高い理想を掲げて、社会的に意義のある仕事に取り組んでいたとしても、そこで働く個々人としては、雇用形態や給与が安定しなければ、長く働き続けることは現実的に難しい。雇用や給与が安定し、自分や家族が安心して生活できる基盤を築けてこそ、人はその組織で働き続けたいと思うし、知識やスキルを存分に活かして高いパフォーマンスを発揮できる。

ピッキオには、自然や動植物の生態に精通した、専門性の高いスタッフが数多く在籍している。彼らの力によって質の高いネイチャーツアーを年間を通じて数多く実施できているからこそ、利益を生み、安定した経営が実現できている。一方で、会社として毎年一定の業績を上げられているからこそ、スタッフの持続的な雇用が保てて、事業も継続できる。こうした好循環が維持できているのも「ビジネスという手段を取っているからではないでしょうか」と柳原氏は言う。

（５）何を伝えるか　～「野生動物を見た」で終わってほしくない～

＜生態系の価値を伝える＞

ピッキオのネイチャーツアーでは、自然や生き物の「おもしろさ」や「不思議さ」を伝えることを基本コンセプトとしている。驚きや発見は感動を生み、さらなる好奇心を育む。それはピッキオのファン、すなわちリピーターを作るというビジネス的なメリットだけではなく、エコツーリズムの実現にもつながっている。

「自然や生き物を好きになったり、好奇心を持ってくれれば、『守りたい』という想いも自然と湧き上がってくるはずです。だからこそ、私たちはネイチャーツアーを通じて、一人でも多くの人に、自然や生き物の『すごい』を伝えていきたいんです」（柳原氏）

野生動物の観察を目的としたツアーでは、「実際に野生動物に出会えること」が参加者にとっての価値になり、満足につながる。だが、ピッキオとしては「動物を見られて良かった（楽しかった）」で終わってほしくないとも考えている。

「私たちとしては、個々の生き物や草木だけでなく、それぞれの動物や植物の関係性、つまり生態系全体にも目を向けてほしいと思っているんです」（柳原氏）

森に入り、多様な自然環境や生き物を観察すれば、個々の生き物や植物が単独でそこに存在しているわけではなく、密接に関わり合い、支え合いながら、生きている姿が浮かび上がってくる。人間の視点や価値観からは「不要」で「無駄」に見えるものでも、それが別の生き物の生存には「不可欠」なことも多々ある。

「動植物のつながり、生きとし生けるものの網の目に向けることで、生態系という仕組みそのものに価値があることを知ってもらいたいんです」（柳原氏）

単に野生動物を見せるだけでなく、生態系全体への視点を持ってもらい、その価値を理解してもらう。ピッキオのネイチャーツアーの根幹は、まさにこの点にあるのだろう。

２　高尾「TAKAO 599 MUSEUM」

（１）魅力的な空間を生み出すデザイン

年間 300 万人（※8）もの登山者が訪れると言われる、東京都八王子市の高尾山。東京都内でありながら豊かな自然が広がる一帯は「明治の森高尾国定公園」に指定されている。その玄関口である京王高尾線・高尾山口駅から歩いてわずか数分のところに「TAKAO 599 MUSEUM」はある。

この場所にはもともと「東京都高尾自然科学博物館」があり、2004 年 3 月に閉館したのち、跡地と所蔵資料が東京都から八王子市に移管。その後、八王子市を中心に関係団体、地元住民、有識者などからなる「高尾の里拠点施設整備あり方検討会」で土地や資料の再活用の方向性について議論が重ねられ、2015 年 8 月に「TAKAO 599 MUSEUM」としてオープンした。行政区分上は観光施設であり、主管は八王子市観光課。管理・運営は、民間の指定管理者（株式会社京王エージェンシー）が担っている。

同館の存在は、開館後すぐに大きな話題を集めた。それは八王子市が所有する公共施設でありながら、建物、展示、グッズなどが洗練されたデザインで統一され、従来の自然公園（国立公園、国定公園、都道府県立自然公園）内の博物館やビジターセンターとは一線を画する斬新な施設となっていたからだ。

入館は無料で、毎年 30 万人以上の人が訪れている。以前の東京都高尾自然科学博物館が、同じく入館無料だったにもかかわらず、年間利用者数が 6～9 万人程度（閉館前の数年間はイベントなどで 10 万人を超える）だったことを考えれば、高尾山麓の拠点施設として十二分の成果を上げているといっていい。

ここでは「TAKAO 599 MUSEUM」を事例に、自然公園における集客力のある魅力的な施設について考えてみたい。

※8　東京都環境局「高尾・陣場地区自然公園　管理運営計画～高尾・陣場ビジョン～」より

同館が大きく利用者を伸ばした要因は、何よりも「明確なコンセプトに基づくデザインの力」にある。学芸員の古茂田慎也氏の話を聞いて、つくづく感じたのは「このミュージアムは、人が集まる魅力的な空間を作るため、細部まで緻密にデザインされている」ということだ。ここで言うデザインとは、単に見た目のキレイさ、斬新さのみを指すのではなく、人の興味や関心を引きつける仕掛け、さまざまな目的や機能を具現化する空間設計も含んでいる。

施設を作るにあたって、まず考えられたのが「地域における機能」である。単に「高尾山の情報を発信する施設」というだけでなく、はじめに〝八王子市〟の〝高尾山麓〟に位置する施設としての機能・役割を明確に定めたのだ。

さまざまな意見を交わす中で出てきたのは、「回遊性の向上」というコンセプトだった。「たとえば、高尾山を登ったあと、ここでひと休みをしてもらって、そのあと山麓のお店を巡ったり、八王子市内にも足を延ばしてもらう。ミュージアムだけで満足して帰ってしまうのではなく、周辺の別のスポットもあわせて回ってもらえるような施設にしていこう、という目的がありました」（古茂田氏）

地域における位置づけが決まったあとは、拠点施設として備えるべき 3 つの機能を整理した。それが「観光機能」「学習機能」「交流機能」である。以下にそれぞれの内容を記す。

□観光機能（＝ビジター機能。観光・登山補助）

・高尾山の登山／観光情報の発信
・市内のイベント情報の発信
・集客イベントの開催
⇒登山をより楽しむための予習環境を提供する空間
　啓蒙活動の一環として、登山に対する高尾山のメッセージを発信する空間

□学習機能（＝ミュージアム機能。新しい文化の創造）

・高尾山の歴史や生態系の紹介
・講習会やガイドツアーの実施
⇒高尾山の豊かな生態系・歴史など、秘めたる魅力を発信する空間
　未来の文化を創出する子供たちへ、体験型の学習環境を提供する空間

□交流機能（＝公園・広場機能。地域活性・交流）

・誰もがくつろげる空間
・カフェの運営
⇒子供も家族も、誰もがくつろぎ楽しめる空間
　地域に開かれた、パブリックスペースとして機能する空間

施設の空間設計に際しては、上の 3 つの機能を具現化する基本構造として、「くつろぎスペース」「展示スペース」「映像スペース」という 3 つのスペースを設けることとした。

□くつろぎスペース

……カフェ機能を持ち、誰もが活用できる空間

□展示スペース

……高尾山の歴史や登山ルートの紹介、花や昆虫など自然物に特化した展示

□映像スペース

……剥製を壁面に展示し、映像と組み合わせて独自展示の実現

各スペースの空間デザインや展示、映像にもこだわっている。【画像Ⅱ-3】

1階の大部分を占めるメイン展示「NATURE COLLECTION」は、16の展示台で構成され、展示台にはアクリル樹脂に封入された草花や、今まさに飛ぼうとするリアルな昆虫標本が並ぶ。

壁面の「NATURE WALL」は、高尾山の豊かな生態系のなかで生きる多様な動物たちの剥製と、プロジェクションマッピングの手法を用いた映像を組み合わせた展示で、四季折々の生き物たちの営みをダイナミックかつユーモラスに体感できる。

別の壁面には情報ガイド「599 GUIDE」がモニターで流され、「高尾山のマナー講座」「高尾山の歩き方（ルート紹介)」「発見！高尾山の秘密」といった高尾山を知るための情報を映像で見ることができる。どの映像もアニメーションを効果的に使い、わかりやすく、ユーモラスに解説されている。

芝生広場に面した開放的なスペースには「599 CAFE」があり、軽食・デザートを食べたり、休憩することができる。テーブルとイスは多摩産材を使用している。

【画像Ⅱ-3】上左／メイン展示「NATURE COLLECTION」、上右／映像展示「「NATURE WALL」
下左／情報ガイド「599 GUIDE」、下右／芝生広場「599 GARDEN」

「PLAY MOUNTAIN」はキッズスタディスペースで、高尾山の起伏を再現した小さな山が、訪れた子供たちの学びの場となっている。

また、建物前の芝生広場「599 GARDEN」は広々としたくつろぎのスペースで、モニュメントでもあり、ベンチでもある「599 BENCH」や、子供たちの水遊び場となる「じゃぶじゃぶ池」があり、集いと憩いのミュージアムを象徴している。

さらに、館内サインなどに使用するピクトグラム（絵文字）、ミュージアムショップのグッズ、広告宣伝用のチラシや映像など、ミュージアムに関するあらゆるもののデザインのトーンも統一。オリジナルのフォントも開発した。【画像Ⅱ-4】

そうした細部へのこだわりはすべて、「施設が発信したいイメージを来館者に伝達し、何度も来たいと思わせるような居心地のいい空間を構築するため」だという。

以上のような施設としての総合的なデザイン性の高さは国内外で高い評価を受けており、これまでに「グッドデザイン賞 2016 ベスト 100」「日本サインデザイン賞 2016 優秀賞」「One Show 2016 銅賞」「ニューヨーク ADC 賞 2016 金賞」「JAGDA 賞 2016（複合部門）」などの各賞を受賞している。

【画像Ⅱ-4】左／ミュージアムショップで販売するグッズ、右／宣伝用のチラシ

（２）ミュージアムを作った人々

「TAKAO 599 MUSEUM」が、一貫したコンセプトのもと、細部まで緻密にデザインされているのは、専門のクリエイティブ・ディレクターがミュージアムのすべてを総合的にディレクションしているからである。

企画・総合ディレクションを手がけたのは、日本デザインセンターの大黒大悟氏。武蔵野美術大学のパンフレット、無印良品のクリスマスキャンペーンのアートディレクション、国土交通省による全国 23 半島地域の振興を目的とした展覧会「半島のじかん」のアートディレクションなど、多彩なジャンルのクリエイティブに携わってきたアート・ディレクター／グラフィックデザイナーである。

「高尾の里拠点施設整備あり方検討会」で議論を進める中、同検討会の座長だった江戸川大学教授（当時）の鈴木輝隆氏の紹介で、大黒氏も検討会に参加。その後、クリエイティブ・ディレクターおよびアート・ディレクターとして施設の立ち上げの中心的役割を担う

こととなったという。
　また、大黒氏のディレクションのもと、個々の展示や映像の制作にも著名なクリエーターが参加している。たとえば、「「NATURE WALL」の映像制作はNHKのテレビ番組「デザイン あ」の「思ってたんとちがう！」を手がける柴田大平氏が、音楽は NHK「日曜美術館」のテーマ音楽を作曲した阿部海太郎氏やコーネリアスの小山田圭吾氏がそれぞれ担当した。
　こうした外部の優秀なクリエーターに仕事を依頼するには、当然それ相応の費用が必要だが、八王子市としても魅力的な拠点施設を作るためにしっかりと予算を組んでおり、建設時の総事業費は14.2億円。予算の多寡は、施設の規模や立地環境などとも関係するため、単純にほかとの比較はできないが、「八王子市には『高尾山というブランドの価値を上げていきたい』という明確な目的があり、その一環としてミュージアムの事業にもかなり力を入れていると思います」と古茂田氏は語ってくれた。

（３）訪日外国人対応

　ミシュランのガイドブックで三つ星に認定されて以来、高尾山には多くの外国人観光客も訪れている。そのため「TAKAO 599 MUSEUM」では、訪日外国人対応にも力を入れている。
　展示は「わかりやすさ」を重視し、解説文はできるだけ簡潔にまとめて、英訳も併記している。一般的な博物館が、展示内容について詳しく解説をするため、情報量が多くなってしまうのとは対照的だ。
「私たちが海外旅行に行くときも、それぞれの施設や作品の細かな解説を求めるというより、たとえば『モナ・リザが見たい』『モン・サン・ミッシェルが見たい』と、もっとシンプルな動機で観光をしますよね。高尾山に来る外国人観光客も同じで、彼らはまず『高尾山に登ってみたい』という大きな目的を持っているはずなので、ミュージアムの役割としても『高尾山の魅力をわかりやすく伝えること』がいちばん大事なんじゃないかと思っています」（古茂田氏）
　開館中は4名ほどのスタッフが常駐しているが、うち1名は必ず英語対応ができる人を配置。外国人が訪れたときには積極的に声がけすることを心がけ、館内の案内放送も日本語のほか、英語でのアナウンスを行っている。
　ホームページは、英語、簡体中文、繁体中文、フランス語、スペイン語、韓国語、タイ語の7ヵ国語に対応。SNSを通じて情報発信するときは、日本語のあとに必ず英訳も併記している。
　WEBページの多言語対応を行う場合、施設によっては外国語ページは情報を限定した簡易版とすることもあるが、「TAKAO 599 MUSEUM」では7つのすべての言語において、同じ情報を同じページデザインで発信している。
「ミシュランのガイドブックで紹介されたとき、海外の方は日本人以上にWEBページを見ていることがわかったので、WEBを通じた情報やイメージの発信は特に重要だと考えています」（古茂田氏）
　また、訪日外国人をターゲットにしたわけではないが、ミュージアムショップのグッズ

を買っていく外国人、特に欧米系の観光客が多いそうだ。
「(販売をしていない) ポスターを売ってほしいと言われたこともあります。ヨーロッパの方々にショップのグッズが人気なのは、やはりデザイン性の高さゆえではないでしょうか。個人的な意見ではありますが、大黒さんのデザインは海外の方の感覚に近いんだと思います」(古茂田氏)
ミュージアム独自の視点で編集された「599 BOOK」も日本語と英語を併記し、外国人観光客にも高尾山の魅力を伝える構成となっている。

(4)「興味・発見・満足」という流れ

自然公園内にある博物館やビジターセンターを訪れる人はたいてい、「その地域の自然や動植物について詳しく知りたい」「観光や散策などの情報を得たい」という動機を持って足を運んでいるはずだ。何らかの「興味や疑問」があるからこそ、人はその答えが得られそうな施設を訪ね、求めている知識や情報が手に入る、すなわち興味や疑問に対する答えが「発見」ができれば、施設(および施設が提供する展示やサービス)に対して「満足感」を抱く。
こうした「興味・疑問⇒発見⇒満足」という流れを意識することは、魅力的な施設を考えるうえでひとつのポイントになる。
その観点から言えば、「TAKAO 599 MUSEUM」は施設名からして、よく考えられている。その名称を見聞きすれば、何よりも「599」という数字が印象に残るし、ロゴマークに至っては「TAKAO」や「MUSEUM」よりも「599」の方が大きくデザインされている【画像Ⅱ-5】。
さらに、館内のカフェやショップは「599CAFE」「599SHOP」、建物前の芝生広場は「599GARDEN」というネーミングで、あらゆるところに「599」が使われている。

【画像Ⅱ-5】
ホームページのトップページとミュージアムのロゴ

599 はもちろん高尾山の標高だが、日ごろから登山をしている人ならともかく、高尾山を訪れる多くの観光客にとっては「599」といわれても何の数字かわからないのではないだろうか。実際、筆者は友人と高尾山に行ったとき、「このミュージアムの 599 って何?」「どんな意味があるの?」と質問された。つまり、ミュージアム名を見ただけで、彼らは知らず知らずのうちに「興味や疑問」を持たされていたのである。
「599」という数字に興味や疑問を持った人は、「599 って何だろう?」とミュージアムに足を向ける。そして、館内の展示を見たり、スタッフに「599 って何?」と聞いたりすれば、

いともたやすくそれが高尾山の標高であると「発見」できて、「なるほど、そういうことか！」と「満足感」を得られる。「興味・疑問⇒発見⇒満足」の流れが、展示やサービスのみならず、施設名にも仕掛けられているのだ。

自然公園内の博物館やビジターセンターの役割は、地域の自然や動植物のこと、観光や散策の情報を利用者に伝えることである。
「TAKAO 599 MUSEUM」は、高尾山麓の拠点施設として、そうした基本的な役割を果たしながら、さらにプロジェクションマッピングやアニメーションを使うなど情報や知識の伝え方にも工夫を凝らし、カフェや芝生広場などのんびりくつろぎ、交流するためのスペースも提供してくれている。ショップでは、ここでしか買えない、デザイン性に優れたグッズを販売している。
それらすべてが訪れた人に、驚きや発見、満足感を与えるからこそ、「何度も訪れたい」「また来たい」と思わせる魅力的な施設となっているのだろう。

３　そのほか

今回のレポートではヒアリング対象としなかったが、野生動物の保護管理、利用者の普及啓発や安全管理について先進的な取り組みを行っている「知床五湖」と「尾瀬」について、公開されている資料を参考にしながら以下に紹介する。

（１）知床五湖

ａ　概要

知床五湖は、知床国立公園内の特別保護地区に位置している。広大な知床国立公園内でもっとも利用者が多い地区である一方で、混雑に伴う植生浸食、ヒグマ出没の危険と度重なる閉鎖による不安定な運用などの課題があった。
知床地区全体の特徴として、国立公園の利用や課題に対して、環境省や地元自治体、公園管理団体、エコツーリズム推進団体、観光事業者、ガイド事業者、住民団体など同地区の関係者がしっかりと協議を行い、円滑な実施協力に向けた合意形成を図っていることが挙げられる。
知床五湖に関しても、2009 年に自然保護行政、地元住民団体、観光業界などからなる「知床五湖の利用のあり方協議会」を設立し、自然公園法による利用調整地区制度（※10）を柱とした新しい利用のあり方の検討を開始。2011 年より同制度の運用をはじめ、以後、利用実績や協議会の意見などを踏まえた計画改定を行いながら、現在に至っている。

※10　国立公園の利用上核心的な自然景観を有し、原生的な風景が保たれている地区において、将来にわたる持続的な利用を実現するため、利用人数の調整などを行うことによって、自然景観や生物の多様性の維持を推進することを目的とした制度

b　グリーンシーズンの利用

知床五湖のグリーンシーズンの開園期間は 4 月下旬～11 月上旬。

園地内には施設が 2 つあり、「知床五湖フィールドハウス」は後述する地上遊歩道の入口で、散策の手続きやレクチャーを実施。「パークサービスセンター」には休憩所があり、お土産や軽食を販売している。

散策するために、利用者はまず「高架木道」か「地上遊歩道」を選択する。それぞれの概要や利用条件は以下の通り。

【高架木道】

・全長約 800mで、一湖湖畔まで行くことができる。
・散策は、最終展望台からの折り返しコースで、地上遊歩道へ行くことは不可。
・開園～閉園まで無料で利用可能。
・高架式の木道なので、ヒグマの出没に影響されず、利用することができる。
　また、電気柵（7000V）が張り巡らされているため、ヒグマが登ってくることもない。
・段差がなく傾斜を抑えているため、車いすでも通行可能。

【地上遊歩道】

・5 つの湖を野生の息吹を感じながら原生林を散策するコース。
・散策ルートは、小ループ（1.6km）と大ループ（3.0km）がある。
・開園期間を「植物保護期」「ヒグマ活動期」「自由利用期」の 3 つに分けて、各利用期によって利用条件や利用料金などが設定されている。詳細は次ページの「『地上遊歩道』の利用期間の区分けと利用条件」を参照。

開園期間中であれば誰でも自由に散策できるコースを「高架木道」に限定する一方で、ヒグマとの遭遇リスクや植生浸食のおそれがある「地上遊歩道」は時期に応じて、利用者数の制限、事前レクチャーやガイド引率の義務化などの対策を実施。以上のような明確な利用ルールを設けることで、環境保全や利用者の安全確保・普及啓発などを図ってきた。

利用調整地区制度を適用した 2011 年以降、知床五湖のグリーンシーズンの利用者数は年間 32～40 万人程度で推移している。

「地上遊歩道」の利用期間の区分けと利用条件

	植物保護期	ヒグマ活動期 ※ガイドツアー限定期間	自由利用期
期間	4 月 20 日～5 月 9 日 8 月 1 日～10 月 20 日	5 月 10 日～7 月 31 日 ※大ループは 8 時 10 分以降、10～20 分おきに出発可。小ループは 1 日 9 時、11 時、13 時 30 分、16 時の計 4 回	10 月 21 日～11 月 8 日
利用料	大人 250 円、小人 100 円	大ループ／大人 5000 円前後、小人 3000 円前後（※大ループ料金はガイド会社によって異なる） 小ループ／大人 2500 円、小人 1500 円	無料
所要時間	大ループ／約 1 時間 30 分 小ループ／約 40 分	大ループ／3 時間 小ループ／1 時間 30 分	—
人数	10 分おきに 50 名の立入	1 グループ　最大 10 名	—
備考	・申請書の記入および事前レクチャーの受講が必須 ・混雑に伴う植生浸食を避けるために、10 分おきに 50 名までの立入になります。 ・ヒグマ出没時は地上遊歩道は閉鎖	・登録引率者が引率するツアー（有料、レクチャー受講を含む）への参加が必須 ・大ループは前日までに予約（知床五湖公式 HP、各ガイド会社 HP） ・小ループは当日予約。フィールドハウスで直接 or 電話。事前予約不可 ・ヒグマとの遭遇回避や、遭遇時の対処法を習得したガイドがツアーを引率。それぞれの引率者が無線を所持し、ヒグマの出没情報をリアルタイムに把握することでツアーの安全面の向上を図る ・ヒグマ出没時は全ツアー中止の可能性あり	・レクチャーは任意で受講

c　厳冬期の利用

厳冬期の知床五湖のエコツアーは、2008 年から「知床五湖冬季利用試行事業」として道道知床公園線岩尾別ゲートを起点とする徒歩利用のエコツアーを実施してきたが、往復約 13ｋｍの歩くスキーと 8 時間以上に及ぶ行程などが障害となり、体験プログラムとして定着しなかった。

そのため、2012 年に「知床世界自然遺産地域適正利用・エコツーリズム検討会議」において、知床五湖園地駐車場までのガイド車輌乗り入れによるエコツアーの実施が提案された。その後、環境保全や安全管理対策などが議論され、2015 年から「厳冬期の知床五湖ツアー」として本格的なツアー実施が開始された。

現在、厳冬期の知床五湖は、引率指導者として認定されたガイドによるツアーでのみ散策ができる。開催概要は次の通り。

・期間／1 月下旬～3 月下旬
・スタート時間／1 日 2 回（午前・午後）

・所要時間／知床五湖内の散策。およそ 3 時間程度
・料金／大人 1 名 6000 円～（ガイド事業所によって異なる）
・定員／1 ツアー定員 10 名。1 日最大 150 名までの利用に限定

ツアーコースは、夏期シーズンは散策することのできない湿地帯や湖の上を散策。動物の痕跡や小鳥を観察することができる。また、知床連山を一望したり、木道展望台横からオホーツク海に広がる流氷を望めることが、見どころとなっている。

利用者数は、試行事業としての期間（ゲートを起点に徒歩での往復）は 150～200 名ほどだったが、現在の形（知床五湖園地までガイド車輌で往復）になってからは 2300～2500 名ほどと増加している。

（２）尾瀬

ａ　概要

2007 年に単独の尾瀬国立公園として独立した尾瀬地区では、2003 年以来深刻化している山ノ鼻でのクマの居座りや、1999 年 6 月、2004 年 6 月にヨシッ堀田代で発生した人身事故を踏まえて、ツキノワグマに関する生態状況調査、関係者間協議、対策実施が必須の課題とされていた。

そこで 2005 年からツキノワグマの保護管理対策として生態調査を実施。その結果を踏まえて対策マニュアルが作成されて、2009 年にはマニュアルを運営するために行政・土地所有者・山小屋などで構成される「尾瀬国立公園ツキノワグマ対策協議会」を立ち上げた。

2009 年に作成された「尾瀬国立公園ツキノワグマ出没対応マニュアル」は、その後改訂を重ねながら、現在に至るまで運用されている。

ｂ　尾瀬地区のクマ対策について

「尾瀬国立公園ツキノワグマ出没対応マニュアル」はインターネット上に公開されている。
URL／https://www.oze-fnd.or.jp/pdf/kuma-manual.pdf

ここでは、本レポートのこれまでの記述を踏まえて、尾瀬地区のクマ対策で注目すべき点について述べる。

□専門の対策協議会の存在

前項で述べたように、尾瀬にはツキノワグマ対策に特化した「尾瀬国立公園ツキノワグマ対策協議会」が組織されている。構成員は、環境省（担当課および自然保護官）、各自治体（福島県、群馬県、新潟県、桧枝岐村、片品村、魚沼市）の担当課、地元猟友会、関連企業、山小屋、尾瀬保護財団など。保護管理対策を円滑に推進していくためには、こうした関係者が協働できる組織体制は不可欠である。

なお、協議会の運営や庶務は、尾瀬保護財団が担っている。同財団は 1995 年に設立。環境保全、野生動物の調査・対策、利用者への普及啓発、ビジターセンターなど公園施設の管理運営、環境学習の推進（ミニツアーの実施）、尾瀬国立公園の PR など、尾瀬に関わる多彩な事業を包括的に行っている。

□充実した専門の対策員

「Ⅰ　上高地・立山における現状の調査」で、上高地・立山の両地区において「野生動物の保護管理や利用者への普及啓発に関わる人手が不足している」と述べた。

一方、尾瀬では、年度初めに協議会が、ツキノワグマの生態やマニュアルの内容を熟知した「ツキノワグマ対策員」を任命。対策員は各地区から数名が選出され、地区は山ノ鼻地区、尾瀬沼地区、見晴地区、竜宮地区、ヨシッ堀田代地区の 5 地区ある。

対策員は各地区の窓口となり、ほかの対策員と連携し、関係者と協力しながらマニュアルに基づいた対策を実施することが役割となる。

具体的には、平常時の対策として「利用者への普及・啓発」「誘引物の管理」「情報収集」「生息状況調査」「刈り払い」「警鐘設置」、危険時の対策として「利用者への注意喚起」「警鐘の移動・追加設置」「追い払い」「立ち入り制限」がある。

□集中的な対策地区の設定

クマの居座りが深刻化している山ノ鼻地区、過去に 2 回人身事故が発生したヨシッ堀田代地区では通常の対策に加えて、危険な状況が発生しやすい時期を定めて、集中的な対策を行っている。

また、上記 2 地区については、尾瀬全域を対象した「尾瀬国立公園ツキノワグマ対策協議会」とは別に、地区内の対策に特化した連絡会議を開催している。

c　尾瀬ガイドの認定について

尾瀬では、利用者への安全で快適な、質の高い自然体験を提供する目的で、尾瀬ガイド（尾瀬自然ガイド、尾瀬登山ガイド）の認定を行っている。検定試験などは尾瀬ガイド協会が実施している。

尾瀬ガイドになるには、ガイドとしての高い技術や知識、正確な救急法を備えているだけでなく、「尾瀬と周辺地域の魅力を解説できる知識と能力を持ち、自然保護の原点ともいえる尾瀬において自然保護の精神や環境保全、適正利用への理解と啓発を行えること」が必須条件となっている。

野生動物も含めた自然環境は地域によって異なるため、尾瀬ガイドのような地域に特化したガイドの育成は、質の高いネイチャーツアーを実施したり、利用者へ適切な普及啓発を行い、地域の自然環境を保全していくためには有効だと言えるだろう。

Ⅲ　アメリカの国立公園における野生動物観察

アメリカは世界で初めて国立公園制度を取り入れ、有料制で世界最高水準の自然保護システムを確立している。野生動物の管理についてもさまざまな施策が展開されており、自然環境を保護しながらビジターがその土地特有の自然を楽しめる工夫が各国立公園で行われている。ここではそうしたアメリカの事例を挙げ、日本における今後の野生動物観察ツアーの可能性とヒントを考察する。

（1）アメリカの国立公園の特徴――概要と日本との比較

アメリカには現在 59 の国立公園があり、そのすべては米国政府内務省の国立公園局（National Park Service：NPS）によって管理されている。総面積は 34 万㎢で日本の国土面積（38 万㎢）とほぼ同じといえる。

ａ　管理体制

アメリカの国立公園は土地のほとんどを連邦政府（国立公園局）が所有している。区域内の取り締まりも国立公園局が行っており、自然環境だけでなく、敷地内にあるホテルやレストラン、売店などの施設も当局の管理下にある（公園内で営業する有料施設の事業者は公園内経営権を取得し、その契約に基づき収益の一部を公園の管理に還元するのが通例）。アメリカの国有地の中でもより独立した管理制度と体制を持っているといえる。この点で、土地の所有と関係なく区域を指定して国立公園とする日本の制度と大きく異なっている。

さらに国立公園局は区域内の道路を含むほとんどすべての建設事業も自ら実施する（日本では国土交通省の公園部局が行う）。

日本の国立公園との大きな違いは、アメリカの国立公園ユニットでは公園区域すべての「資源（resource）」を保全対象としている点で、この中に自然景観や動植物、文化的、歴史的なものも含まれている。

ｂ　面積など

アメリカの国立公園の総面積は 34 万 km²で、これは日本の国土面積（38 万 km²）とほぼ同程度に相当する。

国立公園のシステムを管理する国立公園局には 2 万人以上の職員が勤務しており、それに加え、のべ 30 万人以上のボランティアが管理・運営に参加している。職員一人あたりの管理面積は 15.6 ㎢、職員一人あたりの利用者数は 1 万 5000 人になる。

これに対し日本の国立公園の総面積は 2.19 万㎢。現地で管理にあたる職員数は 187 名（2017 年）であり、職員一人あたりの管理面積は 117 ㎢、職員一人あたりの利用者数は 188 万人。つまり、日本の国立公園で環境省のいわゆる「レンジャー」に出会う確率はかなり低いといえるが、地元の地方公共団体、民間事業者、NPO、地域住民、国の関連機関などがその管理に参加することで国立公園の維持管理が保たれている。

c　職員・レンジャーの位置付け、ボランティア制度

2 万人を超える職員を擁する国立公園局を支えているのが、職員の分業制度と研修制度である。国立公園局職員はそれぞれの技能や専門領域によって 16 の職域（キャリアフィールド）に細分化されており（下表参照）、募集の際には本人の持っている経験や学歴がそのポストに十分であるかどうかが審査される。

またそれぞれの職域に職員研修制度があり、そこで求められる能力を養成している。国立公園局全体としてはビジターサービスに重きが置かれて、インタープリター（自然解説担当官）や法執行官など、ビジターサービスや管理業務関係の職員数が多い。また各公園とも多くの維持管理職員を抱えており、日常的な維持管理行為は草刈りから建物の補修に至るまで、職員が直接管理を実施している。

一方、公園内の自然・文化資源(natural and cultural resources)の管理についても日本とは大きく異なる特質がある。国立公園の適正な「管理」のために国立公園内の自然・文化的な資源の目録を作成し、その変化についてモニタリングする。仮に悪影響が認められた場合には移入種駆除などの対策を講じる体制がある。こうした業務には科学的な調査に精通した専属職員があたり、また公園管理者やビジターサービス部門に客観的で科学的な情報や評価を提供している。これも日本の国立公園には見られない特徴的な機能だろう。

また、アメリカの国立公園には充実したボランティア制度（Volunteer-in-Parks Program: VIP プログラム）があり、2016 年にはのべ 34 万人ものボランティアが公園管理に参加した。ボランティアの募集は、政府のボランティア募集ウェブサイ　ト(www.volunteer.gov)を通じて一括して募集されている。各公園にはボランティアコーディネーターが配属され、公園内各部門からのボランティア受け入れ希望を集約して、政府の募集サイトに情報を掲示する。長期ボランティアに対してはユニフォーム、帽子、作業に必要な安全装備などのほか、無料のボランティア宿舎が提供される。キャンピングカーやキャンプサイトの無償提供もある。日本のパークボランティア制度とは異なり、ボランティアが個別に公園と契約を結ぶ形態をとっている。ボランティアの多くは退職した高齢者、学生など。外国人に対しては国際ボランティアプログラム(International Volunteer-in-Parks Program: IVIP) プログラムがあり、国立公園局国際課が一元的に募集を行う。参加者に対しては交換訪問者用ビザが発給され、観光ビザによるボランティアプログラム参加は認められていない。

国立公園局職員の 16 の職域（キャリアフィールド）

	キャリアフィールド	業務内容、求められる能力
0	重要な共通コンピテンシー（職員の能力）(Universal Essential Competencies)（＊）	すべての職種において、あらゆるレベルの職員１人１人に求められる職員としての能力（コンピテンシー）のことである。これは、同僚や上司、チームなどからも、また国立公園局の適応指導（オリエンテーション）とミッション再確認研修プログラム、個人的教育と経験などから得られるものである。共通コンピテンシーは、全職種の基礎であり、全職員に非常に重要であるため、それ自体では独立した職種ではないものの、独立した項目としてこのリストに掲載している。
1	管理及び事務 (Administration and Office	国立公園局内のすべての部署における管理や事務補助を担当する職種である。予算、経理、人事、物品購入、財産管理などの幅広い能力が求められる。

	Management Support)	
2	文化資源管理 (Cultural Resources Stewardship)	公園の文化的資源の保存、保護、維持及び解説を担当する職員である。歴史、考古学、文化的景観、歴史的建築物、博物館管理、人類学などに関連する業務を行うとともに、州政府、地域の団体、部族政府に対して、指導や技術的補助を行う共同プログラムなどに携わる専門的職種である。
3	火災及び航空管理（Fire and Aviation Management）	火災防止や（森林内の）燃材蓄積防止、組織的森林火災及び野火管理、航空管理及び使用、ならびに事故指揮システム（災害及び緊急時）などの特別な状況に対応するための専門的な技術を持った職種である。
4	歴史的保存技術及び技法 (Historic Preservation Skills and Crafts)	保存技術、保存の考え方、ならびに長期的なプログラムである保存及び技術研修 (Preservation and Skills Training (PAST))や伝統的技法及び素材の使用などを含む歴史的財産の維持管理等保存のための技術に特化した専門的職種である。
5	情報管理 (Information Management)	コンピューターと通信技術のプログラム分野に関連する業務に携わる。GIS（地理情報システム）のような資源管理に関係したコンピューターのシステム、図書館業務を含む技術情報の保存と検索など、様々な分野にまたがる業務に携わる職種である。
6	自然解説、教育及び協力団体 (Interpretation, Education and Cooperating Association)	従来より公園内で行われてきた自然解説を担当する職員に加え、地域の教育プログラム及び公園の自然解説の内容を統合するような教育カリキュラムの作成を行っている職員、ならびに公園の協力団体と密接に関係しながら仕事をしている職員など、幅広い業務を対象とする職種である。
7	法執行及び資源保護 (Law Enforcement and Resource Protection)	米国公園警察(U.S. Park Police)を含む、法執行に従事している職種である。連邦法規及び規制、人間関係論、巡視活動、資源保護、ならびに犯罪捜査などに関する特別の研修を受ける。
8	維持管理（メンテナンス、Maintenance）	技術職及び職人(WB 給与体系に所属する職員：Wage Board(WB) Position とは、連邦政府職員のうち主にブルーカラー的な業務に従事する職員を対象とする給与体系。これに対し、ホワイトカラー系の職員のポストは、General Schedule(GS) Positions と呼ばれ、給与体系が独立している。)により構成される 80 を越える職種の系統(Classification Series)と施設管理者のような専門者集団に関係する職員により構成される職種である。研修コースの例としては、通常の維持管理プログラム、職業訓練コース、技術職（職人）及び専門免許取得プログラム、特別維持管理能力開発プログラムなどがあげられる。
9	自然資源管理 (Natural Resource Stewardship)	自然資源を保護し維持するために必要なツールに焦点を当てた学際的な職種である。職員の業務内容は、資源の特定、評価、モニタリングのための技術、一般的生態系管理と、NEPA(国内環境政策法)や他の環境法や政策の遵守などである。
10	組織開発 (Organization Development)	組織及び職員の能力開発、研修及び指導、教育ならびに機会均等に責任を負っている職員により構成される、さまざまな分野にまたがる職種である。

11	計画、デザイン（設計）及び建設 (Planning, Design and Construction)	計画及び施設開発サポート（環境影響評価、公衆の参画）、設計及び建設（建設場所や構造物ごとの規制要件及び許可制度など）、計画、設計及び建設のための技術的な補助を含む、学際的で他分野にまたがる職種である。
12	レクリエーション及び保全プログラム (Recreation and Conservation Programs)	主として、国立公園局の直接の業務ではないレクリエーションプランナーとして、各種の技術補助プログラムに携わっている職員により構成される職種である。具体的には、河川・トレイル及び保全補助・助言(Rivers, Trails and Conservation Assistance)、長距離トレイル研究(Long-Distance Trails Studies)、パートナーシップ原生景観河川研究 (Partnership Wild and Scenic Rivers Studies)、水力発電補助(Hydropower Assistance)、土地及び水源保全基金(Land and Water Conservation Fund)、連邦政府の土地を公園に(Federal Lands to Parks)、都市公園及びレクリエーションの復活(Urban Park and Recreation Recovery)、経費分担の挑戦(Challenge Cost Share Program)などの各プログラムに参加する職員などが含まれる。
13	リスクマネージメント（職業上の保健及び安全） (Risk Management (Occupational Health and Safety))	保健及び安全規制遵守の観点から、生命・安全問題、職業安全及び健康法(OSHA)規制、職員及び利用者用施設及び事故の監査・評価、労働者補償プログラム(OWCP)に基づく苦情にかかわっている専門的な職種である。
14	専門的な職種 (Specialty Field)	特定の職種に分類されにくい幅広い分野にまたがる職業系列により構成される職種である。例としては、コンセッション管理、国際業務、土地管理、議会関連業務、広報、執筆及び構成などがある。
15	指揮、管理及び指導 (Supervisions, Management and leadership)	この職種は、各公園ユニット及び組織的な指揮・管理を達成すること、各職員及びグループの潜在的能力を発掘すること、個人及び組織の能力を増進し、チームごとの業務効率を向上させるという責任を負っている職種である。
16	利用者管理（Visitor Use Management）	特別公園利用許可（Special Park Use）管理、緊急医療サービス（EMS）、捜索及び救助、バックカントリー及び原生地域管理、利用者制限管理、公園の状況に関する社会・経済学的な分析の適用などについて責任をもつ職種である。

出典：『アメリカの国立公園』鈴木 渉（2017）
（「国際生物多様性の日『生物多様性と持続可能な観光シンポジウム』
～国立公園のインタープリテーションを考える 配布資料）

d　ビジターサービス

アメリカの国立公園局では、ビジターサービスの質を保つために国立公園局の満足度調査（visitor survey）を毎年実施している。

2017 年度予算要求書によれば、2013 年～2015 年度の満足度は 98%。ビジターサービスは職員の対応、施設整備・管理、情報提供（自然解説を含む）などの総合的な評価結果といえる。国立公園のビジターサービスの質は、訪問者数と満足度によって評価される。日本の場合には、こうした評価は一般的に訪問者数により実施されている。各国立公園における利用者の満足度調査という、経験の「質」の評価を実施していることが、アメリカ

の調査の特徴といえる。国立公園局職員はいわゆる「パークレンジャー」として活躍し、国立公園の「顔」として統一したイメージを保つためのユニフォームの着用や、立ち居振る舞いや接客の質を保つための充実した研修制度なども用意されている。

ビジター向けサイン計画などについては一元的に業務を行っている。印刷物については各公園に地図付きパンフレットとパークニュースが用意されており、国立公園局の印刷物には「ユニ・グリッド（uni-grid）システム」というデザインシステムを導入。これは基本となるＢ版用紙にあらかじめ決められたグリッドに従って文章や写真の配列することにより、全体的なイメージを統一するというものである。

アメリカの国立公園のビジターサービスの基本はビジターセンターでの展示や無料新聞の配布、レンジャーによる自然解説プログラム、公園の紹介映画などが充実していることだろう。

（２）野生動物の保護管理体制

ａ　国立公園内における自然の把握とモニタリング

アメリカの国立公園の管理の特徴は、各国立公園ユニットがそれぞれ資源管理(resource management)部門を持っていることだ。この資源管理部門は公園内の資源の状態を把握し、必要な場合には対策を講じる。大きな国立公園になると、独立した科学(science)部門が設置され、資源の状況把握だけではなく、事業の科学的な評価なども実施する。

資源管理部門には、公園の有する資源に応じて、水質、大気、植生、地質、歴史、文化、昆虫、野生動物、鳥類などの専門家が配属されている。職員は公園内の資源に関するインベントリー（目録）を作成し、そのモニタリングを実施している。またデータを収集、分析し、自然解説部門や事業評価プロセスにフィードバックする。

こうしたモニタリングが継続的に行われていることにより、公園内での自然・野生動物観察やツアー、自然解説を円滑に行い、ビジターの満足度を得ていると考えられる。

ｂ　野生動物の保護管理と安全対策

アメリカの国立公園の多くはグリズリーやブラックベアなどの生息地であり、同時に野生のクマ観察が大きな観光の目玉となっている。そのためクマの生息域を擁する各公園ではクマと人間との衝突、事故を防ぐための対策が徹底して行われ、成果をあげている。

対策にあたっては、先述したモニタリングによる生息数、生息エリア、行動パターンなどの情報が活用され、それをもとにクマの専門知識を持つエキスパート職員がビジターへの情報提供、注意喚起、教育、パトロールなどを行っている。また各ビジターセンターで配布される無料の冊子やホームページ上にクマの生態や遭遇した時の対処法などを詳しく記載、周知することで、事故の予防を行っている。

アイダホ州　イエローストーン国立公園の事例

世界で初めて国立公園として認定されたイエローストーン国立公園では、かつて来園者数を増やす目的で野生のグリズリーベアやブラックベアの餌付けが行われていた。次第にクマは人間に餌をねだるようになり、キャンプ場やホテル、来園者の車が襲われ死者が続

出する事態となった。1960年代、公園は本格的なクマ保護管理のプログラムを実施。「野生は野生のままに」をスローガンに、クマ対策用の専用ゴミ箱の設置や、餌付けの禁止、クマと人との接近距離の制限、クマ生息エリアへの立ち入り制限、人慣れした危険個体の駆除などを行ってきた。2000年以降、負傷事故は減少、ほとんどのクマは人間の食べ物やゴミを利用していない。一時期は駆除頭数が増え、絶滅危惧種となっていたグリズリーも個体数を増やし、絶滅危惧リストから外された。

現在もイエローストーン国立公園ではクマから約90mの距離を保つことをビジターに求めており、その結果、クマも人もストレスなく観察活動を行えるようになっている。なおイエローストーンのこうした取り組みは、アメリカ内の多くの国立公園で踏襲されている。

アラスカ州　カトマイ国立公園の事例

カトマイ国立公園はアラスカ南西部に位置し、世界最大のヒグマの保護区域。約2200頭の個体群が確認されており、その姿を見ようと毎年4万人を超えるビジターが訪れる。

公園内で最も人気があるブルックスキャンプはサケが遡上し、ヒグマが集結する7月になると1日に300人ほどのビジターが訪れ、宿泊することも可能。こうした環境下でクマの保護と安全にクマを観察する機会をビジターに提供するため、公園では徹底した管理プログラムが実施されている。プログラムの目的は大きく５つに分けられ、

１．自然状態でのクマ個体群動態の維持
２．自然なクマの採食パターンと生息地利用の継続
３．クマに人間と「餌」とを結びつけさせないようにすること
４．クマと人の軋轢を最小限にすること
５．人々がクマについて学び、観察し、正しい理解を得る機会を提供すること

特筆すべきは５で、クマが生息する世界を人間が知ることで、クマと人との軋轢について理解し、それを防いでいくという姿勢である。

これらを具体的な対策に落とし込んだものとして、公園ではビジター全員に事前のレクチャーを実施。クマの観察ポイントには高架歩道や展望台を設置することで安全性と観察性を高めている。また国立公園規制により、ビジターがクマに接近したり、クマの46m以内に留まることを禁止している。クマの自然な行動を維持するため、クマが人間の生活域近くにいない限り、職員も強制的にクマを移動させることはしない。

宿泊に関しては、キャンプ場を囲む電気柵や、クマを誘引する可能性のある食料や道具類を保管する施設を設置。クマがビジターの所持品に損害を与えることを防いでいる。ピクニックは指定されたエリアのみ許可され、ゴミは国立公園管理局のスタッフにより毎晩回収、焼却される。またクマ対策の訓練を受けたスタッフがブルックスキャンプ全域に配置され、ビジターの動きを管理し、解説などを行っている。スタッフはクマの生態や行動学、防除技術、クマスプレーや銃器の使用法について訓練を受けている。

また国立公園近隣の町には、国立公園局の公認を受けた「Bear Viewing」専門のガイド会社が数多く存在し、ビジターに安全にクマ観察に参加できる機会を提供している。さらにこうしたガイド業により、地域経済の活性化が促進されている。

（３）ネイチャーツアーの現状

ａ　国立公園スタッフによるレンジャープログラム

アメリカの国立公園内には必ずビジターセンターが設置されており、ほとんどの公園で毎日無料で各分野の専門知識を持った職員による「レンジャープログラム」が開催されている。

ほとんど場合が予約なしで参加でき、レンジャーと一緒にトレイルを歩きながら自然の成り立ちや歴史を学ぶもの、動植物を観察するもの、先住民の神話を聴くものなど、その内容は多岐にわたる。子ども向けのツアーも多く、キャンプサイトなどに宿泊するビジターに対してはキャンプファイヤーや焚き火を囲みながらのスライドトークなどもある。

民間のガイド会社とは違い、料金は無料で、予約も不要ということで、当日の天候や体力、興味によって自由かつ気軽に参加できる点で参加者はとても多い。また公園の自然や歴史など、専門分野に精通し、自然解説に特化した研修を受けたレンジャーが担当することから満足度も高く、結果的にビジターが自然環境や野生動物について興味や理解を深めることに繋がっていると考えられる。

イエローストーン国立公園のレンジャープログラム例（2019 年度）

日程	プログラム	開催頻度	時間
6～9 月	ガイザー滝ハイキング ガイドと歩きながら地形や自然を観察	１日１回、毎日開催	1.5 時間
6～9 月	イエローストーンの野生動物を知る 公園の代表的な動植物をレクチャー	１日 2 回、毎日開催	20 分
6～7 月	夜のお話会 イエローストーンの歴史と神話	１日 2 回、毎日開催	45 分
6～9 月	秘密の火山ツアー 美しい火山湖を歩いて火山の成り立ちを学ぶ。	１日 2 回、毎日開催	2.5 時間
6～9 月	ジュニアレンジャープログラム イエローストーンの自然や成り立ちを勉強してジュニアレンジャーワッペンをもらおう	１日 6 回、毎日開催	30 名

国立公園によっては野生動物観察や写真撮影ツアーなども開催している。

ｂ　民間ガイド会社との提携

アメリカでは国立公園内でのガイド活動には、商業ライセンスとともに公園が認可したガイド会社への所属が必要となっている。国立公園のホームページには認可を受けたガイド会社の紹介があることが多く、利用者も安心してツアーを申し込むことができる。

国立公園側が公園の自然や動植物、地形などに精通したガイドや会社に認定を与えることは、動植物や人間の安全を守るだけでなく、民間のガイド会社の活性化や経済的なサポートにもつながり、ひいてはそれが国立公園システムの活性化にもなっていると考えられる。ま

た、積極的にガイドを利用することで、個人での散策では得られなかった知識や自然の中で安全に活動するための技術、野生の動植物への理解をビジターが獲得できることはビジターの成熟につながり、「野生を保全しながら自然を楽しむ」という理想的な国立公園のあり方につながるはずだ。

c　個人での動植物観察に対するサポート

各国立公園のホームページには、個人散策でも野生の動植物を観察しやすいよう豊富な情報が提供されている。

アラスカのデナリ国立公園のサイトを例にあげると、「Things to Do（公園で何をする？）」という項目の中に「Wildfile Vewin」のコーナーを設置。

内容は

・国立公園内に生息する哺乳類、鳥類、魚類、両生類の紹介
・それらの動物がどこで見られるか、種別に詳細なエリアや観察可能時期を紹介
・野生動物の写真撮影に関するアドバイス
・鳥類の鳴き声を動画と音声で紹介する図鑑

などの情報が掲載されている【画像Ⅲ-18】。また、そうしたインフォメーションに加えて、

・野生動物と出会った時の安全対策
・国立公園局の専門家チームによる種別の最新研究の論文公開

などの情報も随時公開されている。

このように野生の動植物に関する豊富な情報を提供できるのは、国立公園局内に動植物のエキスパートが在籍し、常に最新のモニタリングと研究を行っているからこそだろう。

こうした取り組みにはビジターが公園内の動植物に興味を持つきっかけにもなり、「野生動物観察」というアクティビティが深く浸透する要因にもなっていると考えられる。

（４）アメリカの国立公園から学ぶこと

最後に、ここまで挙げてきたアメリカの国立公園の事例と日本との比較考察を踏まえ、今後の日本での「野生動物観察ツアー」においてどんなことを参考にするべきかを考える。

a　野生動物観察における保護と管理の考え方の成熟

今後、日本の国立公園において安全な野生動物観察ツアーを行っていくために、まず前提として行うべきことは、野生動物の適正な保護管理だと考える。野生動物を観察するということは、どれだけ注意を払ったとしても、野生動物と人間との距離が近くなる。「もっと近くで見たい、撮影したい」というビジターの要望と、「もっと見せなくてはいけない」というガイド側の責任感が高まれば高まるほど、その距離は縮まるだろう。

こうしたことは事実、アメリカの国立公園でも起こっており、それが招いた悲劇はイエローストーン国立公園の事例が参考になる。そうした事態を避けるために忘れてはならないのが、「動物とその行動を自然状態に保持する」という基本原則である。またツアー開催にあたっては、「野生動物を見る（ビジター側）／見せる（主催者側）」という結果に終始するの

ではなく、その目的を「野生動物の世界に触れることで、動物や自然環境について深い知識と理解を得る」という点に置くことが重要だと考える。

この原則、考え方を、公園、ツアー主催者、ビジターの三者が徹底できない限りは、何かしらの形で野生の動植物と人間にインパクトを与える結果になるとアメリカの事例から推察する。

b　ビジターセンターの充実

日本の国立公園にもビジターセンターやそれに類する施設は存在しているが、スタッフの不足や認知度の低さから有効的な活用がされているとは考えづらい。

環境省が平成 27 年に実施した環境省直轄のビジターセンター33 施設に関する調査では、国立公園への来訪経験がある人のうち、ビジターセンターへの来訪経験がある人は 26.9%、その存在を知らなかったと答えた人が 22.9%となっている。さらに来訪した人の総合的な満足度は 43.4%となっている。

アメリカの国立公園のビジターセンターは日本と比較して施設自体が大規模で、自然環境や動植物にまつわる展示も多く、何より無料で手に入る新聞や冊子、地図などが豊富な印象を受ける。常駐するレンジャーの数も多く、全員が動植物や地形など専門分野を持つスペシャリストでもある。ビジターたちの質問に的確に答え、国立公園をより楽しむためのアドバイスをしてくれることから、ビジターたちの信頼も厚い。またビジターセンターでは先に挙げた無料のレンジャープログラムの受付なども行っているため、来園者の多くは「何はともあれ、まずはビジターセンターに行ってみよう」という習慣が浸透していると思われる。

ビジターセンターの充実は、ビジターへの動植物への理解や、予期せぬ動物との遭遇時における安全行動の教育にもつながる。こうしたことから、野生動物観察ツアーを安全に開催するには、ビジターセンターの改革もまた助けになると考える。

c　ホームページの充実

各国立公園を訪れるビジターに、そこでの楽しみ方のひとつに「野生動物観察」という選択肢があるということを周知することは、ツアー参加へのきっかけづくりの大きな助けになる（そもそもどんな動物が見られるのかがわからないと、ツアーを探すこともしない）。

アメリカの国立公園のように、各公園がホームページで積極的に生息する野生動物を紹介し、その生態や魅力、観察できる条件、安全管理などを周知することにより、ビジターの野生動物への興味関心を高めることができるのではないだろうか。また、その場合は外国人対応の英語表記、中国語表記などもできればベターだと考える。

d　専門家としてのレンジャーの育成とマンパワー

アメリカの国立公園のほとんどで毎日開催されているレンジャープログラムは、ビジターが公園の成り立ちや自然環境、動植物について気軽に学べる機会である。それぞれのプログラムを提供するのは、専門知識を持ち、研修を受けたスペシャリストたち。さらに無料で予約不要ということで、その人気は老若男女問わず高い。

日本の国立公園では、こうした無料・予約不要で、かつ内容的にも充実したプログラムはほとんど見られず、あったとしてもその多くは民間が行う有料のプログラムだったりする。

ただ、開催頻度が低く、参加したくても都合が合わないケースも少なくないと想像できる。「国立公園に行けば、いつでも面白いツアーに参加できる」という期待感と安心感があれば、野生動物観察ツアーという新しい分野の認知も可能ではないかと考える。そのためには専門知識を持ったレンジャー、インタープリターの育成、マンパワーの拡充が望まれる。

Ⅳ　野生動物などの観察ツアー

　　および情報発信の可能性の検討（まとめ）

（１）野生動物観察をテーマとしたガイドルート造成の可能性

野生動物の生息環境の保全や利用者の安全に配慮しながら、野生動物観察をテーマとしたネイチャーツアーを実施するには、「Ⅱ　ほかの地域での特筆すべき事例」や「Ⅲ　アメリカの国立公園における野生動物観察」で述べてきたように、

対象地域における

「綿密な調査に基づく野生動物の生態の把握」

「野生動物の適正な保護管理体制の確立」

が前提となり、それらを実現するには**「野生動物に関する専門知を有するプロフェッショナルな人材（組織）」**の存在が不可欠である。

適正な保護管理体制を確立しないまま、安易に観察ツアーを行えば、

・野生動物の行動や生息環境に対する侵害（disturb）

・フィールドでの人間と野生動物の衝突

・野生動物の行動変化による、周辺地域への被害

などの問題が起こり、野生動物と人間の双方にとって不幸な状況に陥ってしまう。

ただ、野生動物の保護管理体制の確立は、自然公園の管理を担う国や地方自治体、もしくは行政から指定を受けた公園管理団体などの管轄であり、野生動物に関する専門知も必要とされるため、日本山岳ガイド協会として直接的に関与するのは難しいだろう。

野生動物観察をテーマとしたガイドルートを造成するため、日本山岳ガイド協会としてできる現実的な方法のひとつとしては、**「各地の専門家・専門団体と協働体制を構築すること」**が考えられる。

その地域で長年にわたって野生動物の研究・調査を続けてきたり、保護管理に関わってきた実績のある専門家・専門団体であれば、(組織によって程度の差はあるかもしれないが)野生動物の生態の把握はできているだろうし、長年の調査研究に基づいた観察の方法やその注意点、衝突を回避するためのノウハウなども持っているはずだ。また、ネイチャーツアーを企画・実施している実績があれば、インタープリテーションのノウハウ（毛皮や足形などの小道具を使ったり、タブレット PC で動画を見せたり、など）も確立されているかもしれない。

各地の専門家・専門団体が有している、その地域に特化した「野生動物を含めた自然環境全般に関する知識」や「インタープリテーションや安全管理のノウハウ」を研修などを通じてレクチャーしてもらうことで、「野生動物やその生息環境を disturb せずに」かつ「ツアー参加者にとっては安全性が高く、満足度も高い（＝遭遇率の高い)」、質の高いネイチャーツアーの造成が可能になるのではないだろうか。

「Ⅰ　上高地・立山における現状の調査」で述べた、立山カルデラ砂防博物館のフィールドウォッチングのように、**毎年の実施実績をもとにブラッシュアップされたネイチャーツアーがすでにあれば、そのツアー内容をそのまま利用させてもらう**という方法もある。

Ｉの「１　上高地」「２　立山」の項でも述べたが、自然公園内の拠点施設（博物館やビジターセンター）の専門家・専門職員としても、ネイチャーツアーなどを通じて公園利用者への普及啓発を促進させたい考えはあるものの、マンパワーの不足によって思うように実行できていない現実がある。

日本山岳ガイド協会のガイドが入ってきてくれることは、「広報・宣伝網の拡充」「集客力の増大」「実施頻度の増加」などのメリットがあり、ツアーの情報が広く周知され、実施頻度が増えれば、より多くの人への普及啓発につながる。

また、全国組織である日本山岳ガイド協会が関わることで、それぞれの地域で行われているネイチャーツアーに関するノウハウを集約・共有もでき、ある地域での成功事例をほかの地域で応用していくことができるかもしれない。

立山カルデラ砂防博物館の飯田肇氏は、「民間のガイドやツアー会社」と「各地の専門家・専門団体」との将来的な関わり方として、次のようなアイデアを語ってくれた。

「将来的な理想を言えば、博物館やビジターセンターの専門家・専門職員がモデルコースを企画し、そのモデルコースを民間のガイドやツアー会社が事業化して実施する。そうすることで、多くの人が質の高いネイチャーツアーを体験できる機会が増えるのではないでしょうか」

先述した「各地の専門家・専門団体による研修」をさらに発展させて、知床の「知床五湖登録引率者」や尾瀬の「尾瀬ガイド」のような、それぞれの地域の自然解説や野生動物対策に特化したローカルなガイド認定制度を作っていってもいいのかもしれない。

今後の展開への参考となるよう、巻末の「資料１」として「野生動物の観察に適したエリアと拠点施設」を一覧にしてまとめた。

（２）訪日外国人対応と情報発信について

訪日外国人対応を考えるには、まずは**「誰に」「何を」「どのように」伝えていくか**、を明確にしなければならない。

訪日外国人が「自国にはないもの（体験）」「日本ならではのもの（体験）」を求めているのは共通しているが、国籍（その国の自然環境や文化的背景、価値観など）によって興味関心が異なっているのは、「Ｉ　上高地・立山における現状の調査」で述べた通りだ。

そのため、「訪日外国人」と一括りにするのではなく、「どこの国の人」には「どんな情報」を発信すれば興味・関心が高まるのかをしっかりと整理し、そのうえでその国の人にリーチしやすいメディアに情報を載せていくことが大切なのではないだろうか。

そうしたマーケティング的な観点からの訪日外国人対応や情報発信については、本レポートでは詳しく考察できていないため、さらなるリサーチが必要かもしれない。参考までに、巻末の「資料２」に「英語（または他言語）による日本のアウトドア情報の発信サイト例」として、さまざまなスタイルの外国語サイトの例をまとめた。

また、「何を伝えるか（＝どんなツアーを造成するか）」に関して、訪日外国人が求めているものが「日本でしか経験できないこと」であるならば、テーマを野生動物に限定せず、そのほかの日本特有の自然や文化と組み合わせたネイチャーツアーとすることで、訪日外国人の関心度や、実際に体験したあとの満足度が高まるのではないだろうか。

個人的には、立山カルデラ砂防博物館の「立山の雪を体験しよう」などは、野生動物観察やアニマルトラッキングに加えて、世界有数の多雪地帯の雪を味わえるという点で、日本ならではの要素が含まれており、伝え方次第では訪日外国人が興味を持ちそうな企画だと感じた。

情報を伝える際には、Ⅱの「TAKAO 599 MUSEUM」の事例で見たように、「わかりやすさ」――つまり、わかりやすいデザインだったり、見せ方は大切な条件かもしれない。「ここに行けば、自分が欲しているものが得られる」ということを直感的に伝えていく方法を模索していく必要はあるだろう。

＊　＊　＊　＊　＊

日本山岳ガイド協会としては次年度（2020 年度）以降、本格的に「野生動物観察をテーマとしたツアーコンテンツの開発・改善」（訪日外国人の受け入れや WEB による情報発信の体制の整備、野生動物観察をテーマとしたガイドルートの造成など）に取り組んでいかれることと思います。

日本山岳ガイド協会のガイドの方たちが、これまで多くの人たちを日本各地の山に案内することで山や自然の素晴らしさを伝えてきたように、野生動物観察においても「野生動物の魅力や彼らが暮らす自然環境の多様性」を伝え、そのことがひいては人間の側（クライアント、ガイド）の満足だけではなく、動物たちや彼らの生息環境を守っていくような事業に育っていくことを期待しています。

資料１

野生動物の観察に適したエリアと拠点施設

エリア		特徴	拠点施設
北海道	大雪山旭岳・黒岳	ロープウェイを利用して亜高山帯から高山帯に上がると、シマリスやナキウサギなどが観察可能。稀にオコジョと出会えることも。	旭岳ビジターセンター 層雲峡ビジターセンター
	知床羅臼	冬の海ではアザラシ類やトド、春から夏はクジラ類、シャチ、イルカ類などを観察でき、クルーズ船もある。	羅臼ビジターセンター
	野付半島	草原ではエゾシカやキタキツネ、ユキウサギなど、夏の野付湾では観光船に乗ってゴマフアザラシが観察できる。	野付半島ネイチャーセンター
	釧路湿原	湿原や周辺の林には散策路があり、エゾシカ、エゾリス、シマリス、キタキツネ、ユキウサギなどが生息。	温根内ビジターセンター
	襟裳岬	国内最大のゼニガタアザラシの生息地がある。遠いが岩礁で休む姿を観察できる。	襟裳岬「風の館」
青森	白神山地	ツキノワグマ、ニホンザル、カモシカ、ニホンテンなどが生息。林道やブナ林の散策コースがあり、フィールドサインを観察できる。	白神山地ビジターセンター
岩手	岩手山	ニホンモモンガ、ニホンノウサギ、カモシカなどが生息。山頂（2038m）周辺ではオコジョと出会うこともある。	網張ビジターセンター
宮城・山形	蔵王連峰	多くの哺乳類が生息し、散策路ではニホンザル、ニホンアナグマ、カモシカ、ニホンリスなどに出会うこともある。	蔵王野鳥の森自然観察センター
新潟	浅草山麓遊々の森	ブナ、ミズナラなどの落葉広葉樹林には、ツキノワグマ、カモシカ、ニホンリス、ニホンテンなどの哺乳類が生息する。	県立浅草山麓エコ・ミュージアム
石川	白山ブナオ山	観察舎の対岸や周辺で、カモシカ、ツキノワグマ、ニホンザル、ニホンリスなどを観察できる。4月ごろには、対岸で草を採食するツキノワグマの姿を高い確率で見られる。	ブナオ山観察舎
栃木	那須平成の森	落葉広葉樹林の中に散策路が整備され、ツキノワグマ、ニホンノウサギ、ホンシュウジカなどのフィールドサインが見つけられる。	那須平成の森フィールドセンター

神奈川	箱根仙石原	ススキ原にはカヤネズミが生息し、周辺ではイノシシ、ニホンノウサギなどのフィールドサインが見つけられる。	箱根ビジターセンター
山梨	八ヶ岳高原キープ協会自然歩道	散策路でホンシュウジカやニホンリスと出会うこともある。ホンドギツネやニホンテン、ヤマネなども生息する。	県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
静岡	静岡県立森林公園	アカマツ林を中心とした里山環境にムササビやニホンリスなどが生息している。	県立森林公園ビジターセンター
山口	秋吉台	日本最大のカルスト台地の草原には、カヤネズミやニホンノウサギなどが生息している。	秋吉台エコミュージアム
長崎	対馬	ツシマヤマネコだけではなく、シベリアイタチなど大陸系の種類が生息する。	対馬野生生物保護センター
福岡	平尾台カルスト	石灰岩でできた台地に草原が発達し、ニホンノウサギ、イノシシ、タヌキ、カヤネズミなどが生息する。	平尾台自然観察センター
鹿児島	奄美大島 ・金作原原生林	照葉樹林が鬱蒼とし、アマミノクロウサギやアマミトゲネズミなどの固有種が生息。リュウキュウイノシシの掘り跡はよく目につき、昼間でも姿を見せることがある。	奄美野生生物保護センター
沖縄	山原 （やんばる）	スダジイなどの常緑広葉樹からなる森林に覆われ、オキナワトゲネズミやケナガネズミなど貴重な固有種が生息する。	国頭村環境教育センターやんばる学びの森

『フィールドで出会う　哺乳動物観察ガイド』
（山口喜盛・著／誠文堂新光社／2017）をもとに作成

※上記リストの作成意図について

当初は「国立公園における野生動物観察センターのリストアップ」という依頼だったが、国立公園には「野生生物保護センター」「世界遺産センター」「ビジターセンター」などの地域の自然や生き物に関する施設はあっても、野生動物観察を主目的とした施設は確認できなかった。

「野生生物保護センター」「世界遺産センター」「ビジターセンター」といった施設では、「観察のしやすい特定の野生動物の観察会」や「アニマルトラッキング」など野生動物関連のプログラムを実施しているところもある。また、野生動物やその痕跡の観察を主目的として謳ってはいないが、「自然観察会」「フィールドウォッチング」「スノーシューハイク」といったプログラムを実施している施設は多く、それらに参加することで野生動物やその痕跡を観察できるケースもある。

野生動物観察を含めた自然体験プログラムを実施している主な施設を一覧化することも考えたが、それよりも今後の展開を考慮して「野生動物の観察に適したエリア」と「拠点施設」を表としてまとめることにした。野生動物の観察に適したエリアであれば、ツアーコンテンツ造成の可能性があり、そのためには地域の自然に精通した専門家（拠点施設の専門職員など）からのアドバイスが不可欠であるからだ。

公益社団法人日本山岳ガイド協会
〒160-0008 東京都新宿区三栄町 18 番地　丸藤ビル 201 号
TEL: 03-3358-9806　　FAX: 03-3358-9780
e-mail: office@jfmga.com